
世界を救う者～ルミナシア編～

黄星テツヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を救う者〜ルミナシア編〜

【Nコード】

N7646S

【作者名】

黄星テツヤ

【あらすじ】

ピカチュウが人間に転生してルミナシアのディセンダーとして生きていくお話です。

作者の初めての投稿作品なので温かい目で見ていってください。投稿は話が浮かんだら頑張ってすぐに投稿したいと思います。

なんか違和感あるので題名変更！！

注意事項

他の漫画の要素や技入っているので注意してください。

他の漫画やアニメのキャラも出すつもりです。

ストーリーは本作通りではありません。

エピソード（始まり）（前書き）

かなりの駄文です。けれど一生懸命書いたのでどうかゆっくり見て
いってください。

エピソード（始まり）

ここはカントー地方の地図に描いてもない小さな島。

そこには人は住んでおらずポケモンもピカチュウだけという不思議な島。

その島はとても平和で争いごともなく、人が誰一人来なくて平和な島でした。

けれどある日その平和な島にある日、小さな光が落ちてきました。

島のピカチュウたちはその光が何なんだったのか調べに行きました。

その光の落ちた場所にはピカチュウが住んでいたような形跡がありました。

けれどここに誰が住んでいたのかまったくわかりませんでした。

この島のピカチュウ達は忘れてしまったのです。

ここに住んでいたピカチュウのことを最初から存在していなかったかのように・・・

エピソード（始まり）（後書き）

次の話もエピソードです。
神と出会います。

エピソード（神との遭遇）（前書き）

2話目完成。

このまま頑張りたい。

エピソード（神との遭遇）

「ん？ここどこだ？」

何もない真っ白な世界そこにいたのは1匹のピカチュウ。

「俺こんなところで寝てたっけ？」

このピカチュウは前回で行方不明になっていたピカチュウでした。

「んゝ・・・ここどこだろう？それとも夢かな？」

「残念だが夢ではないぞ。」

「えっ？」

ピカチュウの前に現れたのは髭がかなり長いじいさんだった。

「あんたは誰だ？」

「ワシは神様じゃ。」

「神様？つうことは俺は死んだのか？」

このじいさんは神様だった。

ピカチュウは神様「死んだと思ったので聞いてみた。」

「安心せい。おぬしは死んではおらんぞ。この時空にワープさせただけじゃ。」

とりあえず死んではないらしい。

「なるほどね。ならワープさせたってどういうこと？」

ただワープさせたといつてこが気になつたので聞いてみた。

「簡単じゃ、おぬしをもといた世界から今いるこの時空にワープさせたんじゃ。」

「なるほどね。なら話は簡単だ、俺を元の世界に戻してくれないか。」

「残念じゃがそれはできん。」

「なぜだ？あんたは俺をワープさせれるんじゃないのか？」

「それは今、おぬしの力が必要な世界があるからじゃ。」

「俺の力？俺はその辺のピカチュウと力はあるまいかわんないぜ？」

「確かにそうじゃ・・・だがおぬしには異能という力を全てあつかえる才能があるのじゃ。」

どうやら神は元の世界に戻してくれないらしい。

理由はピカチュウに救つてほしい世界があるかららしい。

ピカチュウは力がないので断ろうとした。

しかしピカチュウには異能という力が全て使えるらしい。

「異能って？」

「異能とは現存するエネルギーやZ・Y」うん。よく理解した。」
・
「そうか。」

異能の意味がわからなかった・・・。

質問してみるとわけのわからない話になつたのですぐにカットした。

「けどその異能って何かのリスクとかあるのか？」

「あるぞ・・・聞きたいか？」

「・・・簡単に頼む・・・。」

「あんまり使いすぎると小さくなったり別の生き物になったりする

ロストというのがあるぞ。」

「・・・それだけ?」

「まだある、そのロストしすぎるとコードエンドというのがおきる。」

「コード・・・エンド?」

なんとか理解しつつ聞いていると異能は使いすぎるとロストとコードエンドというのがあるらしい。

コードエンド・・・嫌な感じがする・・・

「コードエンドとは簡単に言うと・・・死だ・・・。」

「・・・絶対に世界は救わん・・・。今すぐに元の世界に返せ・・・。」

「安心しろ。そのコードエンドくらいならワシが抑えておくから。」

「ロストは?」

「二つは無理じゃ・・・。」

「ちっ・・・。」

どうやら神は二つを抑えるのは無理らしい。

ピカチュウはそれでも嫌なのか舌打ちしてたが・・・。

「いいじゃろう・・・どうせ戻ってもおぬしは退屈なんじゃろ?」

「・・・否定はしない・・・。」

「安心せい。あんまり使いたくないなら日本刀くらい「足りねえ」・・・え?」

「日本刀と異能の力とコードエンド抑えるだけじゃ足りねえよ。どうせならその世界の回復アイテム全種と最強になれるアイテムくらいよこせ。そうじゃないと絶対救わん。」

「お・鬼がおぬしは!!」

「鬼で結構・・・どうする?」

かなりの怖い顔でいろいろ注文し最後に脅す……主人公には見え
ない……。

「むむむむむ・・・」

「ふんふん」

「...うん、うん、うん、うん、うん。」

「5・・・4・・・3・・・2・・・」わかったわかった！！加えてやるわ！！」・・・ちっ。」

結果は神が折れた・・・。

「ただしおぬしは絶対に世界救ってもらおうからな!!」

「わかったわかった・・・あつ、どうせならその世界の全ての技m転送!!」

神はこれ以上は何も加えさせるかと転送した。

「ふふ．．．昔よりかなり性格が違ったの．．．ちゃんと戻してお
くかの．．．」

エピソード（神との遭遇）（後書き）

エピソード2話目終了。

主人公がかなりの鬼畜になってしまった……とりあえず神に任せます！！

次の話はキャラ説明で。

キャラクター情報（前書き）

今回はキャラクターの情報

・・・とりあえずがんばろ。

キャラクター情報

名前：ピカチュウ・ライトニング

武器：日本刀（名：長刀・三日月）、エンシェントブレード

アクセサリー：クルシスの輝石（無機生命体と睡眠と食事の能力は神の嫌がらせでなくなりました。）

髪の色：金髪の毛先は黒

目の色：両目青色

性別：男 年：16

身長：172 体重：51

（ピカチュウの姿のままじゃいけないのと神は思ったので人間化させた。）

異能：全て可能だがまだあまり使えないうえにすぐにロストする（現在使える異能：電力・空・光）

ロスト：ピカチュウになる（しゃべることが可能。）

知能：なかなか賢い（流石にリタヤリフィルにはかなわない。）

好きなもの：カノンノ、ロックス、アドリビトムの皆、リング、ギター、昼寝、ティータイム、カノンノの手料理、ロックスの手料理、甘いもの

嫌いなもの：悪、ハロルドの薬、昼寝を邪魔するもの、ロスト時に来る肉球同窓会、ロスト時に来る可愛いものが好きなメンバー、×料理人のご飯、アドリビトムの皆を傷つけるもの&悪口を言うものの、辛いもの

休日の過ごし方：昼寝・ギターを弾く（のちに登場するキャラに係るものです。）、読書、ロックスの手伝い、修行。

足りないのは発見しだいここに記入します。

キャラクター情報（後書き）

とりあえずできた・・・。

これでとりあえずまともになったと思う。
ついに本編に入ります。

第1話（出会い）（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

かなり嬉しくてその一日テンションが高くなっていました。
では次の話どうぞ。

第1話（出会い）

く ルバーブ連山（峠への溪谷）く

「さて、と。今回の仕事も、これで終わり！船に戻らなくちゃ。」

この少女はカノンノ・グラスバレー。

ギルド『アドリビトム』の一員だ。

今は、仕事の帰りでルバーブ連山を下っていた。

「早く帰ってロックスを安心させてあげないと・・・あれは？」

遠くに不思議な光が見えて、そしてとても速いスピードで通り過ぎていった。

「何だろう・・・」

カノンノはあの光が気になってしまった。

「迎えまで、まだ時間がある・・・行ってみよう！」

カノンノは不思議な光が向かった場所に向かった。

く ルバーブ連山（ルバーブ峠）く

「ん？・・・ここは？」

ピカチュウは目が覚めた。

周りを見てみると、どうやらここは山のようなのだ。

もっと奥を見てみるとさらに高い山があった。

どうやらこの山と繋がっているようなので同じ場所とは理解ができた。

「ん、でも俺は何でここにいるんだ？」

ピカチュウに記憶は無かった。

神に記憶はほとんど消されていて、覚えているのは名前だけだった。

「とりあえず自分が何を持っているか見てみるかな・・・ポーチがあるしね。」

- - 確認中 - -

「あるのは、よくわからんグミみたいなのが6種類が1個ずつと、よくわからんビンが6種類が1個ずつと、刀が一本・・・」

これだけだった。

あとは何も無く普通だった。

「・・・とりあえずこの赤いグミ食べよう・・・腹へったし・・・。」

赤いグミを一個食べた。

そのとたん体とポーチに違和感が出た。

「あれ？体が動かしやすい・・・？」

体の違和感は体が動かしやすくなったからだった。

「ポーチのは・・・あれ？」

そこにあっただのは赤いグミだった。

「なるほど・・・あのグミやビンは飲み食いとまた出てくるのか・・・。」

どうやらポーチはアイテムを一個使くとまた出てくる仕組みになっているようだった。

「腹減ったし、このグミ腹をいっぱい食うか!!」

・・・食事中・・・

「ふう、お腹いっぱいだ。にしてもこのポーチはおもしろいな。」

ピカチュウはポーチをとてもおもしろいので気に入った。

「さて、とりあえず山を下りてみるか・・・ん？」

足音が聞こえてきた。

「何だろう？」

聞こえてくる方向は自分の真正面。

だんだんこちらに近づいて来ているようだ。

「やっかついた・・・あれ？」

女の子は周りを見ていた。
そしてこちらに気がついた。
なぜか少し頬を赤めながら。

「あ・あの、すいません。」

「ん？どうした？」

女の子はこちらに話しかけてきた。

「ここらへんで不思議な感じがする光を見ませんでしたか？」

「いや、見てないな。」

女の子はどうやら不思議な感じがする光というのをさがしているらしい。

不思議な光・・・何かひつかかる・・・。

「そうですか・・・そういえば名前をまだ言ってませんでしたね。
私はカノン・グラスバレーです。」

「俺はピカチュウ・ライトニング、ところで不思議な感じがする光
ってここら辺に落ちたの？」

「はい・・・どこに行っただんでしょうか・・・」

「もう一つ・・・ここには他に誰かいたか？」

「私が来たときはいませんでしたよ？」

「・・・もしかするとだが、俺がその不思議な光かもしれない・・・
・・・」

「えっ!？・・・どうしてですか？」

この少女は名前はカノン・グラスバレーだった。

とりあえず自己紹介されたので自分もしといて、気になった所を聞いてみた。

そしたらこの場所に落ちたらしい。

・・・カノンノが見たときはこの場所には誰もいなかった・・・この場所に不思議な光が落ちてきた・・・、自分が目を覚めるところにいた・・・、周りを見た時は、自分以外誰もいなかった・・・、そして・・・自分には記憶が無かった・・・。

この条件なら自分がその不思議な光の可能性が高い。

その仮説を言ってみるとやはり驚かれた。

とりあえず説明しておくことにした。

- - 説明中 - -

「確かにその可能性が高いですね・・・。」

「ああ、・・・とりあえず俺はこの山を下りるよ。」

「えっ！！行くところがあるんですか？」

「いや・・・とりあえず街にどうにかなるだろう・・・。」

カノンノも信じてくれたようだ。

とりあえず自分は目的通り山に下りることにした。

そしたらカノンノに驚かれて、行く所があるのか聞かれた。

ピカチュウには残念ながら行くところが無かったが、街に行けばどうにかなる気がするのでとりあえず行ってみることにした。

「危険ですよ！記憶も無いのに一人で行動するなんて！ここには強い魔物だっているんですよ！！」

「大丈夫だよ。俺にはこの刀がある。」

「それでも駄目です！！・・・そうだ！なら私たちの船に来ませんか？」

「・・・けど邪魔にならないか？」

「大丈夫です。その船はギルドをしていますから。」
「なるほど・・・でも俺なんかが入れるのか？」

カノンノに必死で止められた・・・。

そんなに弱そうに見えるのかのとピカチュウが思っているとカノンノに船に來ないかと言われた。

けど自分がそんな所に行ったら邪魔になりそうと思ったので聞いてみたら大丈夫と言われた。

その船はギルドというものをしてるらしい。

けれどそんなのに記憶の無いよそ者が入れるのか氣になった。

「大丈夫ですよ。今、そのギルドは人手不足ですから入れますよ。ピカチュウさんとても強そうだし。」

（それなら何で止めたんよ・・・まあ、街でバイトするよりかいかな・・・。）

「・・・わかった。そのギルドに入るから、カノンノその船に案内してくれ。」

「わかりました。じゃ、ついて来てください。」

ギルドに入るそう言うときカノンノはついて来るように言って来た道に戻って歩き出した。

ピカチュウはその後ろ姿を追いかけてながらこう思っていた。

（なぜこの子はこんなに俺を引き止めるのだろうか・・・とりあえずついて行くか・・・。）

対するカノンノは

（よかった、ついて来てくれて・・・けどピカチュウさん見たら何で頬が熱くなるんだろ・・・帰ったらロックスに聞こう・・・。）

第1話（出会い）（後書き）

とりあえずこれで1話は終わりです。

正直終わり方がまったくわからない・・・

次は話はパソコンが無いところに行くので更新が遅れます。
帰って来た次に日に書く予定なのでよろしくお願いします。

次はついにピカチュウが異能を使います。

第2話（戦い）（前書き）

いきなりですがいろいろと設定変更します。

まずピカチュウの頭脳はかなり上昇していることと

ロストの時の記憶と性格は無くすることと

性格を優しくして勇敢にしました。

いろいろ設定変更してすいません・・・それでは本編どうぞ!!

第2話（戦い）

「あれ？ピカチュウさんその胸元にある赤い石はなんですか？」

「赤い石？・・・本当だ・・・なんだろうこれ？」

カノンノはピカチュウの胸元にある『クルシスの輝石』に気がついた。

けれどピカチュウは今まで気づかずに能力もわかっていなかった。

「体に異変無いですよね・・・？」

「大丈夫だよ。逆に体が動かしやすいし。」

「ならよかった・・・あつ、橋が見えましたよ。」

カノンノはピカチュウに何も悪いところが無いか聞いてみたがピカチュウに何も無いうえに逆に調子が良いと言われたので安心した。

ピカチュウとカノンノが『クルシスの輝石』の話をしていると橋が見えてきた。

「橋が上がってるな・・・どうする？」

「大丈夫です。ほらそこにあるボタンを押してください。」

橋についたが、橋が上がっているのでカノンノにどうするか聞いてみた。

そしたらカノンノはピカチュウの左側にあるボタンを押してと言われた。

「これか？・・・ポチッと。」

ピカチュウはボタンを押した。
そしたら橋がゆっくりと下りてきた。

「・・・おもしろい。」

「えっ？何か言いましたか？」

「はっ！！な・なんでもないよ。」

「あやしー・・・。」

「あっ、ほら橋が下りたから早くさきに進もう。」

「・・・わかりました。」

ピカチュウは不覚にもこの橋がおもしろくてつい口に出してしまっ
た。

しかもその言葉がカノンノにも内容は聞かれなかったが少し聞こえ
たようで慌ててしまった。

何でもないと言ったが怪しまれているままなのでとりあえず、さき
に行こうと促した。

そしたらカノンノはしぶしぶ賛成してくれた。

（次は言葉に出さないようにし・・・何だ・・・この気配・・・
）

ピカチュウは次は声に出さないように誓おうとすると近くに何かの
気配がした。

（この感じは・・・あの岩の陰からか・・・。）

どうやらその気配は近くにある岩陰にあるようだった。

「どうしたの？早く行こうよ。」

「待て。」

カノンノが気づかずにさきに行こうとしたので止めた。

「えっ？どうしたの？」

スッ

近くにある石を拾った。

スタスタ

岩陰の横についた。

グッ

握り締めた

ブン！！

岩陰に向かって石を投げた。

ガン！！

何かにあたった。

ばた

何かが倒れた。

「えっ！？何々！？」

カノンノが慌てた。

「この岩陰に何かの生き物がいた・・・これだ。」

それは青いオタマジャクシのような生き物だった。

「あ、それはオタオタだよ。」

「オタオタ？」

「うん。魔物の一種でとても弱い部類なんだ。」

「ふゝん・・・とりあえず気絶してるし、さきに進むか！」

「そうだね・・・あっ！」

「どうした？」

「さつきは止めてくれてありがとう。」

カノンノに急にお礼を言われた。

「どうしたんだ急に？」

「だってあのまま進んでたら、私ケガしていたかもしれないしさ。止めてくれたピカチュウさんにお礼を言いたくて。」

「なるほどな・・・じゃ、かわりに俺の頼みごと聞いてくれないか？」

「えっ！？頼みごと！？」

「ああ、かなり簡単だ・・・俺にさん付けやめてくれないか？」

「えっ？さん付け嫌いなんですか？」

「ああ・・・さん付けされると体が痒くて痒くて・・・。」

「はは・・・わかりました。さんは付けないようにしますね。」

「ありがとう。それじゃ、次こそ行こう！」

「はい！」

- - 移動中 - -

くく 橋の前

「ポチツと。」

橋がゆっくり下りてきた。

「・・・あき（はっ！！）」

「あき？」

「あ・秋はまだかなって（あぶね、飽きたなって言いそうだった・・・。）」

「・・・。」

「さ・さあ、早く行こう！！（その怪しい人見るような目止めてく。）」

- - 移動中 - -

くく ルバーブ連山登頂口くく

「えっと、ここからの道は・・・いつもはこのまま道をまっすぐ行くんだけど、今回はそのわき道に行くの。そこに、迎えの船が来てくれるんだ。」

「そうか、それじゃ、行く・・・カノンノ気をつけろ！！敵だ！！」

「えっ！！ど・どこ？」

「上だ！！」

もう船に着くという所でまた何かの気配がした。

気配がする所を見ると10の鳥がこちらに向かって飛んできている。

カノンノは気づいていないらしくて急いで声をかけた。
カノンノは何処かわからないようで慌てていたが場所を言うすぐに武器を構えた。

「あれは、ガルーダ！！オタオタよりかなり強いから気をつけて！」
「了解！！」

ガルーダ一匹がピカチュウに向かって突っ込んできた。

「あまい！！」

ピカチュウは軽々とよけた。

（ん？何か頭に入ってくる？・・・剣の技か？三つもある・・・。）

ガルーダが旋回してまたこちらに突っ込んできた。

（ちょうどいい、一つ試してやる・・・。）

「くらえ！！『瞬迅剣』」

ピカチュウは剣を抜くと突きをくりだした。

ギャア・・・

そのままガルーダの胸を突き破り一撃で絶命させた。

（ん？後ろから気配が・・・。）

ピカチュウの後ろからガルーダが突っ込んできた。

（避けてから二つ目をあててやる！！）

ギアアアアアアア

仲間の仇だといわんばかりに低空飛行で突っ込んできた。

「あまいぜ！」

ピカチュウはジャンプして避けた。

「くらえ！！二つ目の技『魔神剣』！！」

ピカチュウは剣から衝撃波を出した。

その衝撃波はガルダに突っ込んでいきガルダに命中した。

「とどめだ！！」

ピカチュウはガルダをそのまま切り裂いた。

ギアア・・・

（次は・・・3匹でかたまってるな、俺を警戒してるのか？）

ガルダ達はピカチュウに警戒したのか、かたまって戦おうとしている。

（おもしろい・・・最後の技で決めてやる！！）

ピカチュウは走り出した。

ガルーダも反応して迎えようとしたが・・・

ピカチュウはさらに加速をしてガルーダ達の目の前に来た。

ギヤアアアア？

「終わりだ・・・『拔刀・桜』」

1番目の前のガルーダを右斜め上に抜刀で斬り流れるように2番目のガルーダを左斜め前に斬り足に力を加えて飛び出し3番目のガルーダを横に一閃した。

ピカチュウは剣を鞘に戻した。

その瞬間ガルーダ達から大量の血が出てきて絶命した。

「終わったか・・・後は5匹だな。」

ピカチュウはカノンノ方に向いた。

カノンノは驚いていた。

ピカチュウがすでに5匹のガルーダを倒していることに。

（私はまだ1匹しか倒してないのに・・・。）

今、カノンノに対峙ガルーダは3匹。

（あれ？あと1匹は？）

「カノンノ！！後ろだ！！」

「えっ！？」

気がつくとガルーダはカノンノ後ろにいた。

後ろにいたガルーダはすでにカノンノに突っ込んできていた。

（ま・間に合わない・・・うつ・・・）
「カノンノ！！」

カノンノはガルーダの攻撃をうけて武器を落としたうえに、威力と体が軽いせいか武器に離れたところに飛ばされてしまった。さらにあたり所も悪かったせいか体が動かなかった。

（どうしよう・・・このままじゃ・・・）

カノンノに攻撃を与えたガルーダがまたカノンノに攻撃をしようと突っ込んできた。
ピカチュウが全力でこっちに来てくれようとしてくれているが間に合いそうにない。

（私死んじやうのかな・・・）

カノンノはほとんど諦めて、目をつぶっていた。
けどピカチュウは諦めていなかった

（くそお！！速く、速く動けよ俺の脚！！カノンノを守るんだ！！）

ピカチュウは最初は魔神剣を放とうとしたが間に合わないので止めて、カノンノの所に走った。

その時だった、ピカチュウは異能に目覚めたのは。

（間に合え！！・・・ん？この頭に入ってくる映像は？）

その映像は王冠を被った少年と体が透けている黒い髪の青年と白い

髪的青年がいて、白い髪青年が、体が透けている黒い髪青年に『光速』で後ろにつく映像だった。

（もしかして・・・この力を使えるのか・・・？）

ガルーダがカノンノに攻撃が当たるのはもう30cmぐらいだった。

（考えるのは後だ！！ぶつつけ本番だ！！）

その時ピカチュウの体が光り輝いた。

そしてピカチュウはカノンノを両腕で掴んでいた。

（ま・間に合った・・・とりあえずもう一度使う！！）

またピカチュウの体が光り輝いた。

そしてピカチュウはガルーダ達と少し離れた所にいた。

「大丈夫か？カノンノ？」

「あ・あれ？私・・・生きてる？」

「ああ、よくわからないけど、俺の新しい力だな。」

「そうなんだ！ありがとうピカチュウ。」

「どうしてしま・・・ん？」

「どうしたの？」

また頭に二つの映像が流れてきた。

一つ目は、顔に瘢痕がついた黒い髪青年の周りに風が舞っている映像。

二つ目は、黒い髪をかなり伸ばしてポニーテイルにしている青年と、さっき透けていた青年だった。

けれどさっき透けていた青年とは、左手から青い炎を出していてか

なりの気迫を出していた。

長い髪をポニーテイルにしている青年が、透けていた青年の周りに電気をだした。

フラッシュオーバー
『空中放電』と言って。

「『フラッシュオーバー 空中放電』・・・使い方も出てきた・・・」

「ピカチュウ？ピカチュウ！！」

「ん？どうした？」

「どうしたじゃないよ・・・急に動かなくなるから心配したんだよ・・・」

「そうか、すまない。」

「大丈夫だよ。けどどうする？私は動けないし、ピカチュウは私を抱えてて剣を構えられないし、ガルーダ達に囲まれちゃったし・・・」

確かにピカチュウとカノンノはかなりピンチだった。

カノンノはさっきの攻撃で体が動かせないし、ピカチュウはそんなカノンノを抱きかかえているので攻撃ができなかった。

さらにピカチュウが剣を持ってないことに気がついたのがガルーダ達はピカチュウ達を囲んでいた。

「こうなったら・・・ピカチュウ、私を餌にしてあいつら倒すか逃げて。」

「はあ！？そんなことしたらお前がただじゃすまないぞ！！」

「こんなことになったのは私のせいだもん・・・だから私が餌になるしかないよ・・・」

「・・・なら二人が助かる方法があればお前も納得するか？」

「えっ！！あるの方法？」

「ああ・・・時間がかかるがな。」

「・・・わかった。ピカチュウに全部任せる。」

「ああ、任しとけ!!」

そう言つてピカチュウは1匹のガルーダに向かつて走り出した。ガルーダは虚を衝かれたのか反応できなかった。そしてピカチュウはそのガルーダの後ろについた。

「吹き飛ばへ!!」

そういつとピカチュウの周りに風が舞つた。そしてその風がガルーダを吹き飛ばした。ガルーダ達はまたピカチュウを警戒したのか固まり始めた。

（狙いどおりだ。次は電気を・・・）

ピカチュウの周りにから電気が発生し始めた。

「えっ!!?えっ!!?何これ??」

「安心しろ・・・カノンノにはあてないから・・・。」

とりあえずカノンノにそれだけ言っておいた。ガルーダは何かをしてくるのか予想できないせいかこっちに襲つてこない。

（好都合だ・・・これだけあれば十分だ!!行け!!）

電気が素早くガルーダを囲んだ。

「終わりだ・・・」
フラッシュオーバー
「空中放電!!」

辺りにが閃光に包まれた。

- - 十分後 - -

「ん？ここは？」

ピカチュウは目を覚ました。

「俺は確か・・・そうだ！！カノンノとガルーダは？」

カノンノは自分の胸の所で気絶していた。
斬り殺したガルーダ以外は姿も形も無かった。
焦げた地面の後以外・・・

「どうやら倒せたらしいが・・・この力はかなり強すぎるな。」

ピカチュウはこの電気のを恐れていた。

「あんまり電気は使わないことにしよう・・・。」

『お~~~~い！！、カノンノ~~~~！！どこにいるんだ~~~~！！』
「ん？カノンノ？・・・船の仲間か？」

遠くからカノンノを呼ぶ声が聞こえてきた。

「とりあえずそこに向かうか・・・。行くところないしな。」

ピカチュウはカノンノをおんぶして声の聞こえるところに向かった。

第2話（戦い）（後書き）

かなり長かった・・・

疲れがたまった気がする・・・

これで2話は終わりにします。

次は入隊試験します。

第3話（入隊試験 前編）（前書き）

中々話が浮かばなかった・・・

しかもまた長くなりそうだったので前半・後半に分けるしかなかった

キャラクター説明更新

好きなもの、嫌いなもの、休日の過ごし方を更新しました。

ちなみに投稿ギリギリ前にも更新しているので、確認お願いします。

では、本編どうぞ！

第3話（入隊試験 前編）

「カノンノ〜〜〜〜！！どこにいるんだ〜〜〜〜！！」

この赤い髪で腹を出している少年はリッド・ハーシエル
今は船が到着したらいつもいるカノンノがいなかったため探索しにきた
のだ。

「どこに行ったんだろう・・・、確か依頼はルバーブ峠の方だよね
？」

この緑色の髪の少女はファラ・エルステッド
彼女も同じくカノンノを探している。

「私がアンジュから聞いたにはそれであってるはずだ・・・。」

この鳶色の髪の大人はクラトス・アウリオン
彼もまた二人と同じだ。

「カノンノの奴何かあったのか？いつもならすぐにいるはずなんだ
けどな？」

「私にもわかんないよ・・・いきなりルバーブ連山ですごい閃光が
あったのは聞いているけど・・・。」

「もしかしたらその閃光にやられたかもしれん・・・。」

「けどその閃光が起きたのは高原の方だろ？カノンノは任務で向か
つてないはずだ。」

「そうだよ！クラトスも変なこと言わないでよ！」

「すまん・・・。」

彼らはカノンノのこともめっているようだ。

そこに

「おゝゝい！！そこに人たちゝゝ！！」

と言いながらこっちに近づいてきた。

「ん？あんたは？」

「俺はピカチュウ・ライティング！あんたらはカノンノの知り合いかい？」

「つつ！？」

「？」

「カノンノを知ってるの！？」

「あ・ああ、後ろで今おんぶしてるよ。・・・気絶してるけど。」

リッドは誰かわからないので名前を聞いてみた。

声をかけた人はピカチュウだった。

クラトスは名前を聞くと何か驚いたようだった。

そんなクラトスの反応にピカチュウは気がついた。

どうして驚いたか聞こうとしたがその前にフアラに質問されたので答えた。

「一つ聞きたいんだが、何でカノンノ気絶してんだ？」

「・・・ちよつと助けるところで失敗して、かなり強い閃光で・・・」

「あの閃光はあなたの仕業なの！？」

「ああ、一応な・・・。」

「立ち話もなんだ・・・船で話せばいいではないか・・・。」

クラトスにそう言われた。

「そうだね。カノンノも無事だし、とりあえず船に戻ろう。」

「そうだな、早く帰って飯にしようぜ。」

「わかった。え〜と・・・？」

「あー！ごめん！名前言い忘れてたね、私はファラ・エルステッドだよ。」

「俺はリッド・ハーシエル。」

「クラトス・アウリオンだ・・・。」

「了解！じゃ、道案内お願いします。」

――移動中――

〳〵バンエルティア号〳〵

「なるほど・・・記憶が無いうえに行く所が無いのね・・・。」

今までであったことをアンジュとクラトスとリッドとファラに話していた。

ちなみにカノンノはアニーという少女に運ばれていった。

「わかりました。あなたをギルド『アドリビトム』の一員として迎えるね。」

「いいのか？俺みたいなのわからない奴なんて入れて？」

「大丈夫よ。カノンノも認めているし、あなたもかなりの実力者だしね。」

「・・・そうですか。」

「けど一応、入隊試験は受けてもらっね。」

「入隊試験？そんなのあるのか？」

入隊試験・・・筆記試験で歴史や地理を書けなんて言われたら一発で落ちそうだなと考えていると

「大丈夫よ。筆記試験じゃないから。ただのモンスター討伐よ。」
「（心読まれた!?）・・・わかってたよ・・・。」

かるくピカチュウは焦っていた。

「そう? とりあえず試験の依頼を考えておくから、その間に船員に挨拶しておいてね。」

「わかった。」

「待て、アンジュ。」

「どうしたのクラトス?」

いきなりクラトスがこれからどの依頼をやらせようか考えているアンジュと

皆に挨拶に行こうとしたピカチュウを止めた。

「この船内見取り図を渡したか・・・?」

「あつ・・・。」

どちらも忘れていたようだ・・・

「ごめんね、はいこれが船内見取り図ね。」

ピカチュウは船内見取り図をもらった。

「この通りに挨拶すればいいんだな?」

「そうよ。それじゃ、挨拶に行つてらっしゃい。」

「アンジュ話がある・・・。」

クラトスはそう言うとアンジュと話し始めた。

「とりあえず俺達は食堂にこうぜ、ファラ。」
「そうだね。」

リッドとファラは食堂に向かった。

「・・・とりあえず行くか・・・。」

- - 挨拶中 - -

〳〵医務室〳〵

「こんにちは〴〵って・・・さっきの・・・。」

「あ・こんにちは、私はアニー・バース。ヘーゼル村の出身です。」

「俺はピカチュウ・ライトニングです。あの〴カノンの状態はどうでしたか？」

「大丈夫ですよ。体にぜんぜん問題ありませんでした。」

「そっか、よかった・・・。」

「もう少ししたら目を覚ますと思いますが待ちますか？」

「ゴメン、アンジュさんに入隊試験の依頼が出されるから待てないんだ・・・。」

「わかりました。なら終わったらでも顔を出してあげてください。」

「わかりました。では、失礼しました。」

医務室を後にした。

- - 移動中+いろいろカット - -

「後は食堂だけか・・・ん？」

ピカチュウは後、船員4人を抜かして挨拶していた。

「後は、クレア・ベネット、ロックスプリングス、ルカ・ミルダ、エミル・キャスタニエが・・・クレアって人とロックスって人は多分食堂だろうけど・・・ルカって人とエミルって人は仕事でいないからどうしようかな・・・。」

エミル・キャスタニエとルカ・ミルダは二人で仕事に出かけていていなかった。

「一応、同室のイリアとマルタに特徴が聞けたが・・・役に立つかな・・・。」

特徴はルカは弱虫や、エミルは怖がりだがかつこいい王子様とか役にたたなそうなことを言われただけだ・・・
ピカチュウが悩みながら食堂とクレス達と空き部屋がある通路に入ろうとすると

ドン！！

誰かが背中にぶつかってきた。

「い」「ああ！！ご・ごごごめんなさい！！」「いやだいぞよ」「お・おわびに焼きそばパン買って来ます！！」「ちよつと待つて！！！」

白い髪の少年と黄色い髪の少年が頼んでもいない焼きそばパンを買いに行こうとしたのでとりあえず肩を掴んで行かせないようにした。

「ああ！！一個じゃ足りませんよね！！なら有り金全「聞けー」

「ひい!!」

とりあえず黙らせた。

「とりあえず、俺は怒ってないから・・・焼きそばパンは買ってこなくていいよ。」

「はい・・・。」

「後、聞きたいんだが・・・君はルカ・ミルダとエミル・キャスタ二エか？」

「はい・・・。」

イリアとマルタの説明通りだ・・・

「俺はピカチュウ・ライトニング。新しく君たちがいるギルドに入った者だ・・・試験はまだ合格してないけど。」

「新しく・・・？何だか急ですね？」

「そういえばそうだね・・・」

「？いつも知らせたりしてるのか？」

「はい、アンジュさんから皆に知らせて、部屋で待機して待ってるんです。」

「来たときに誰かいないと困りますしね。」

「・・・そうか・・・確かに俺は急だもんな・・・。」

（なるほど、だから全員が船にいないわけだ・・・）

「とりあえず、これからよろしくな。」

「はい、よろしく願います。ピカチュウさん。」

「・・・俺のことはピカチュウと呼んでくれないか？」

「えっ!!け・けど・・・。」

「・・・迷惑になりませんか？」

「俺は君を仕事仲間であり、友達としてみたい・・・駄目かな？」

「・・・わかりました。ピカチュウ。」

「よし！！これからよろしくなルカ、エミル！」

握手をするため両腕を出した。

「「こちらこそよろしくお願いします。ピカチュウ！」」

ルカとエミルもそれに応え、エミルが右手をルカが左手を出し握手した。

「それじゃ、俺は食堂に挨拶あるからまたな。」

「うん、バイバイ。」

「試験頑張つてね。」

「ああ、ありがとう、頑張るよ。」

エミルとルカとわかれて食堂に向かった。

・・・移動中・・・

「おじゃまします。」

「あつ、君がリッドとファラが言ってた新しい、ギルドの方ですね。私はクレア・ベネット。初めまして。」

「どうも、初めまして。ロックスプリングスと申します。ロックス、とお及び下さい。」

「俺はピカチュウ・ライトニング。新しく君たちがいるギルドに入った者だ。・・・試験はまだ合格してないけど。」

とりあえず自己紹介。

「ご丁寧に、どうも。僕はギルドの皆さんのお世話をさせて頂いている者です。」

「ロックスさんは、家事やギルドの経理なども任されている、この船の、いわば『コンシユルジュ』なんですよ。」

「この船で皆様が安心してくつろげるよう、日々ホスピタリティの向上に努めています。何か御用の時は申し付けて下さいね。」

「わかりました。」

「それにしても、また船の中がいつそう賑やかになりますね。」

「ええ、食事の時は特に！楽しくなると思いますよ。」

「今日は、ピカチュウ様が新しく入った事ですし。腕にヨリをかけて、ご馳走にしましょうか。」

「そうですね。それじゃあ、今日は忙しくなりそうですね。」

「俺のために・・・ありがとうございます！」

「いえいえ、いいんですよ。それじゃ、ピカチュウ様これからもお願いします。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

今日はご馳走らしい。

ロックスとクレア優しい人だな、と思いつつ部屋を出た。

・・・移動中・・・

「アンジュさん、皆に挨拶終わりました。」

「あら、ちょうどいいわ、ちょうど試験を決めたところなの。」

「試験内容は何ですか？」

「コンフェイト大森林で、ウルフ10匹の討伐よ。同行者はクラトス、モンスターの居場所と姿は依頼書に書いてあるわ。」

「わかりました。（ちょうどいいや、出会った時に何で驚いたか聞こう・・・）」

今回のクエストは、クラトスが同行者らしい。
ピカチュウはであった時のことをついでに聞こうと決心した。

後編に続く・・・

第3話（入隊試験 前編）（後書き）

前半終了！

作者はエミルとクラトスとユーリとガイとロイドとルークとカノンノ（全員）好きです。

だから好きなやつはかなり目立たせようと思います。

名前だけや、名前ですら出てないキャラたちはすいません！！絶対出しますから！！

てかエミルがルカと同じ性格になった・・・出し方がわかんなかったんだよ！！

後半はバトルとピカチュウの過去話メインだから頑張らないと！

さらに他の世界のキャラを出そうと思います。

ヒントは水の力を持ったギターを弾く者です。

第4話（入隊試験 後編）（前書き）

ピカ「皆さんちゅうも〜く、作者が早速やらかしました。」

クラ「感想ページで皆が作者の返事を見れるようにできるのに、それを忘れてメールで送ってしまったのだ・・・馬鹿か？」

すいません・・・

ピカ「はあ、とりあえず答えを言っとくぞ。カツタ様の提案されたエドとアルは登場することになりました。」

クラ「しかし、ハロルドがまだ出てきていないので、もう少し待ってくれ。」

ピカ「けど、頑張つてすぐに出すので安心してくれよ。」

クラ「いろいろ他の出し方があるが・・・死んだやつの出し方のか今は無いからな・・・」

ピカ「作者は鋼の錬金術師はわからないので、死んでないやつを出し方するのでハロルドが必要なんだ。」

クラ「だからこの出し方じゃないんだ・・・すまない。」

ピカ「ちなみになぜ俺をティルズに転生させたかは、作者の好きなキャラクター+これしか思いつかなかったからだって。」

皆さん本当にすみませんでした。

では、どうぞ！！

第4話（入隊試験 後編）

「ここがコンフェイト大森林か。」

ピカとクラトスは今、入隊試験の魔物がいるコンフェイト大森林に来ていた。

「気をつけろ、どこから魔物が出るかわからんぞ・・・」

「わかったよ。てか、あんたに聞きたいことがあるんだ。」

「・・・何だ？」

「あんたはなぜ、俺のことを最初に見た時に驚いていた？」

クラトスは最初にピカを見た時にかなり驚いていた。

ピカは、そのことに気づき聞きたがっていた。

「・・・そのことについては、歩きながら話そう。」

「・・・わかった。」

とりあえず歩きながら会話。

「・・・お前は自分がどんなやつかわかるか？」

「・・・わかんねえよ。気づいたらルバール連山で寝てたわけだからな。」

「そうか・・・ならお前の少しだけなら話せる。」

「全部は？」

「私も、お前の全てを知っているわけではない。」

「そうか・・・知っていることは？」

「・・・すまないが全ては話せない。」

「・・・わかった。」

クラトスは知っていること全てを話してくれないようだ。

「まず、お前は世界の者じゃ無い・・・。」

「!!・・・どういうことだ？」

「お前は他の世界の者なのだ。そしてお前はいろいろな世界を旅し、救っていたのだ・・・これが証拠だ。」

クラトスはそういつて、剣を出してピカに渡した。

ちなみにウィンドパックで出したのでどこから出したは無いです。

「どうだ・・・何か感じないか？」

「・・・何か懐かしくて・・・悲しい感じがする。」

「・・・それが証拠だ。お前はその剣を使って世界を旅していたのだ。」

「・・・思い出せない・・・どうしてだ？」

「・・・お前は这个世界に転生の途中で事故が起きて、別の世界に飛ばされて、記憶が無くなったらしい。」

「・・・マジかよ。」

どうやらピカはこの世界に来る途中で事故が起きて、記憶を無くしたらしい。

「・・・記憶は治るのか？」

「きっかけがあればもとに戻るらしい。」

「きっかけ？例えばどんなことだ？」

「・・・その旅していた世界の者に会うといいらしい。」

他の世界の人に会う・・・無理なことを言い始めた。

「・・・この剣で別の世界にとべるのか？」

「・・・残念ながら無理だ。その力はもとも神がしていたからな。」

「神？誰だそいつは？」

「・・・お前を転生させたものだ。会うには世界を救わなければならない。」

「マジかよ・・・ならどうすればいいんだ？」

「・・・お前の胸元にあるクルシスの輝石だ。」

「？このことか？」

クラトスに胸元にあるクルシスの輝石が必要と言われた。

そう言つてピカはクルシスの輝石を触った。

「・・・何も起こらないが？」

「・・・触るわけじゃない、そのクルシスの輝石の記憶だ。」

「記憶？」

「ああ、そのクルシスの輝石は特別製で1度別れた仲が良い者と、もう1度引き合わせる力があるのだ。」

「・・・なるほど。」

ピカのクルシスの輝石は特別らしい。

その力でピカの他の世界の仲間と会えるらしい

「今、言えるのはこれだけだ。・・・後はお前の記憶の戻った量によつてだ。」

「わかった。てかなんでクラトスはそんなこと知っているんだ？」

グルルルルルル

「ん？・・・ターゲットのウルフようだな。」

「おい、教えるよ。」

「・・・ターゲットをお前1人で倒せたなら。」

「・・・わかった。勝ったら絶対教えるよ。」

ピカは長刀・三日月を手にして構えた。

「待て。」

「ん？なんだよ？」

「さっき渡した剣で戦え。」

「・・・なんで？」

「記憶が戻るかもしれんからな・・・」

「！！・・・上等！！」

ピカはそう言つてクラトスに渡された剣、『エンシェントブレード』
に持ち替え構えた。

その時、背中から光の羽が出てきた。

「うお！！何だこれ！？」

「・・・ふっ、懐かしいな。」

ピカはかなり驚いていた。

クラトスは小さい声でそう言っていた。

「おい！！クラトス何だよこれ！！」

「・・・自分で確かめろ。そのほうが記憶の戻りが早い。」

「マジかよ。」

グルルルルルル・・・

「ちっ、こうなったやってやる。『魔神剣』！！」

ビュン！！

（速い！！）

スパン！！

ウルフが一刀両断された。

（マジかよ！！危険すぎだろ！！）

ピカはこの剣の切れ味にかなり驚いていた。
と同時にかなり畏怖していた。

（この剣はやばいな・・・人前じゃ使うの禁止だな）

ガウウ！！

「！！！！危な！！」

気がついたらウルフの1匹が目の前にいて噛み付いてきた。
それにギリギリで、ピカは気づき回避した。

（さて、どうするかな・・・ん？）

また頭に浮かんできた。

（これは・・・術？）

浮かんだのは技ではなく術だった。

（・・・やってみるか！！）

ピカは詠唱をした。

ワオオーーーーーーン！！

そう吼えたと思ったらウルフ達はいつせいにピカに向かっていった。

「・・・輝く御名のもと」

ピカとウルフ達の距離残り70cm

「地を這う汚れし魂に、裁きの光を雨と降らせん」

ピカとウルフ達の距離残り50cm

「安息に眠れ、罪深き者よ」

ピカとウルフ達の距離30cm

「・・・『ジャッジメント』！！」

辺りに光が落ちてきた。

それがウルフ達に辺り、ウルフ達が消えていった。

「・・・終わったか。」

「・・・俺はこの剣を扱えるのか？」

「ふっ、安心しろ。もともとお前のだ、いずれ使えるようになるぞ。」

「ふっ、そうか。」

この剣は自分は扱えるのかそれが不安だった。
けれどクラトスがいずれ使えるようになると言ってくれたので安心した。

「それじゃ、教えてもらおうか。クラトス、なぜ俺の過去を知ってるんだ？」

「ふっ、簡単だ。私はお前と他の世界で会っているからだ。」

「！！・・・クラトスも別の世界の者なのか！？」

「違うな・・・私はお前に初めてあった、会ったことあるのは別の世界の私なのだ。」

クラトスがピカのことを知っている理由それは別の世界のクラトスが会っているからだった。

「だったら教えてくれ！！俺の過去を！！」

「・・・私から教えることはできない・・・介添え人だからな。」

「介添え人？何だよそれ？」

「自分で調べる・・・過去のお前ならそうしていた。」

「！！・・・わかった、自分で調べる。」

「安心しろ、私からは何も教えられないが、その世界の者が必ず教えてくれる・・・」

「・・・ああ、絶対全て思い出してみせる！！」

ピカは決意した。
しかしいきなり

「・・・どこだここは？めだかちゃんに阿久根先輩と喜界島に球磨川は？」

と聞こえた。

「ん？・・・あれ！？さっきまでいなかったのに？」

「・・・どうやらさっきの『ジャッジメント』でこの世界に一瞬だけ歪みができたらしいな。」

ピカとクラトスが話していると

「・・・ピカ・・・お前・・・何で生きて・・・」

と言われた。

「・・・？何言ってるんだ？・・・もしかして俺と会ったことがあるのか！！」

「あるに決まってるだろう！おまえは1年1組のピカチュウ・ライトニング、俺やめだかちゃんの友達だろ！！」

「・・・っつー！！」

いきなり頭痛が襲ってきた。

ピカの頭の中に1つの言葉が浮かんできた。

「箱庭学園・・・生徒会・・・庶務・・・人吉善吉・・・うつ・・・」

ピカはそれだけ言うと気絶してしまった。

「おっ、おい！？大丈夫かピカ！！」

「安心しろ・・・気絶しただけだ。」

「そっか・・・前みたいに死んだわけじゃないんだな・・・てかあんたは誰だ？」

「クラトス・アウリオンだ。とりあえず一緒に来てくれないか？話

がある。」

「・・・わかった。」

クラトスはピカを担ぎ、人吉善吉と船に向かった。

第4話（入隊試験 後編）（後書き）

今回は以上です。

てかピカの新しい剣強すぎたな（笑）
名前はエンシエントブレードでいきます。

初めての別世界のキャラクターは、めだかボックスの人吉善吉くん
でした。

次回はどうするかな．．．考え中で

では、また次回で！！

第5話（眠り、そして決意）（前書き）

クラ「・・・そういえば作者、お願いごとの期限は書いたのか？」

作者「あ！・・・忘れてた・・・」

クラ「・・・」

作者「すいません！！無言で剣を構えないで！！剣を戻して！！」

クラ「はぁ・・・キャラクターとオリジナルディセンドーは期限は無い・・・」

作者「けど、ある程度多くなったら募集は打ち切ろうと思います。」

クラ「ピカの容姿は7月に入ったら、打ち切るので注意してくれ。」

作者「ちなみにピカは気絶してるので、今回はここに入っていないせん。では、本編どうぞ！！」

第5話（眠り、そして決意）

く???く

ここは一体どこだろう・・・

何で、ここは真っ暗なんだろう・・・

何で、何も聞こえないんだろう・・・

そして・・・俺は何でここにいるんだろう・・・

ピカがいる所、そこは何も無く、何も聞こえず、全てが真っ黒な空間だった。

・・・あれ？

しかしいきなり空間が少しだけ歪んだ。

・・・小さいけど・・・明かりがでてきた・・・

そこに小さいが明かりが出てきた。

何だろう・・・何だか懐かしいな・・・

その光がピカにあたった・・・そこで、ピカの意識は途絶えた。

くバンエルティア号・甲板く

「……ん。」

目を開いたら、そこは海が広がっていた。

「目が覚めたか？」

誰かの声が聞こえた。

声が聞こえた方を向くと、クラトスと善吉がいた。

「ああ、でも何でここにいるんだ？俺は確か、コンフェイト大森林にいたはずだが？」

「……本当に覚えてないんだな……お前は俺の名前を呼んで気絶したんだよ。」

「大方、記憶が戻ったのだろう……」

「記憶？……確かに少しだけ浮かんでるが……まだ全部じゃ無い気がするんだ。」

「なるほど。……それはまだ他に善吉がいた世界から、この世界に来る者がいるのだろう。」

どうやら記憶を少し取り戻したショックで、ピカは気絶してしまっていたらしい。

しかし、それでも全てを思い出していなかった。どうやら記憶が戻るには、この世界に来る者が集まらないといけないらしい。

「クラトスは誰が来るかわかっているのか？」

「すまないがそこまでわからない……」

「そうか……」

「……………」

「……………」

(き・気まずい……)

クラトスもピカも何も言わなくなったので善吉は気まずいと思ってしまった。

「……とりあえず、船内に入るぞ。クエストのことと、善吉のことを報告しないといけないからな。」

「……わかった。」

「えっ？何で俺のこと？」

クラトスに船に入るぞと言われた。

ピカは返事をしたが、善吉は何で自分のことを報告されないといけないかわからなかった。

「お前はここの世界を何も知らないのだろう？だったらこの船で共に行動をしたほうがいい。住む場所も確保できるしな。」

「なるほど……わかった、行こうぜピカ!!」

「……ああ……!!?」

ピカは立ち上がろうとしたがなぜか立ちにくかった。

「どうやらまだ動かしづらいようだな……」

「肩貸すぜ、ピカ。」

「……ありがとう善吉。」

ピカは、善吉に肩で支えてもらい船に入ってしまった。

「バンエルティア号・ロビー」

今、3人はロビーに来ていた。

入ってきた時いたのは、アンジュとカノンノとエミルだった。

「・・・わかりました。善吉君に住む場所を提供しましょう。」

「ありがとう。」

「ただし、働かざる者食うべからず！！ちゃんと仕事してもらいますからね。」

「けど、仕事ってどんなのなんだ？俺はこの世界に来たばっかで全くわかんないぜ？」

「それはクラトスに教えてもらって。」

「わかった。」

「次はピカ君ね。クラトス試験の結果は？」

「合格だ。1人でウルフ全部倒したぞ。」

「ピカすごいね！！」

とりあえず、善吉のことが終わり、次はピカのことになった。

クラトスはピカが合格したことを話した。

そしたらカノンノにすごいと言われた。

しかし本人は・・・

「ああ・・・」

かなり暗くて空返事をしていた。

（ピカどうしたんだろう？）

（わかんない・・・私とルバーブ連山にいた時は明るかったのに・・・）

（船から出る前も明るかったよ・・・本当にどうしたんだろう？）

エミルとカノンがこの返事に小さい声で話しあった。

「・・・アンジュ、ピカは疲れているから早く部屋を教えてやってくれ。」

「わかったわ。ピカ君の部屋は・・・ここよ。」

「わかった・・・行かせてもらっよ・・・」

そういうとピカは指定された部屋に向かっていった。

（（ピカ・・・））

カノンとエミルと善吉は同じことを思って、同じく心配していた。

くピカの部屋く

「・・・くっ・・・」

ピカは部屋についてすぐにベットに倒れた。

「頭がかなり重い・・・そしてかなり眠い・・・」

ピカはそうつぶやき目を閉じた。

く???く

「ん?ここは?」

ピカが目を覚ましたら、真っ白な世界にいた。

「目が覚めたか。」

声が聞こえた。

ピカがそちらを振り向くと、じいさんと女の人がいた。

『気分はどうですか?』

「大丈夫だが・・・あんたら誰だ?」

「何じゃ、忘れたのか?神じゃよ、神。」

『私はマーテル。世界樹の精霊です。』

名前は神とマーテルらしい。

神はどこかであつた気がするが忘れてしまった・・・

「・・・さっきの神が言うからにしては、俺と会つたことありそうない方だな・・・」

「ワシは何回も会っているぞ。」

『私は3回ですね。』

なんとこの2人は自分と会つたことがあるらしい。しかも何回も。

「!!なら俺の過去も知っているだろう!!教えてくれ!!」

「残念だが、ワシから教えてはなんのじゃ・・・」

「何故だ!!」

『貴方の力を目覚めさせるためです。』
「俺の・・・力？」

ピカに記憶を教えない理由それはピカに力を目覚めさせるためだった。

しかしピカはあまり意味がわからなかった。

『はい、記憶を無くす前の貴方はかなりの力を持っていたのです。』
「しかし、事故が起きて記憶を無くして、さらにその力までも封印されていたのじゃ。」

『私達が調べたには、力を戻す方法はただ一つ・・・記憶を取り戻すことです。』

「その方法は、1度会ったことある者と遭遇することじゃ。だからワシとマーテルで今、他の世界の者を呼ぶ準備をしておる。・・・こんな所じゃ。」

「なるほど・・・てことはいずれ俺の絶対に記憶は戻るんだな？」
『はい。だから少しの間だけ待っていてください。』

とりあえず絶対に記憶は戻るらしい
しかし気になったことがあった。

何で俺は記憶も無いのにに飛ばされたのか・・・それが気になった。

「ところで何で、俺の記憶も戻っていないのに他の世界に飛ばしたんだ？」

「それはルミナシアが滅亡の危機になったからじゃ。」
「なるほどな・・・てかルミナシアって言うのか・・・」

今、世界の名前がわかったピカ。

『そろそろ時間ですね・・・』

「もうそんな時間か・・・早いものだ・・・」

「時間で、何の？」

「目覚めの時間じゃ。」

「目覚め・・・・・・・・くっ!？」

急に何かに引つ張られるような感じがした。

『ピカ、今回貴方が人吉善吉と遭遇して記憶のかけらができました。』

「これによりワシらも他の世界の者に遭遇がしやすくなったから安心して世界を救え。」

この言葉を最後にピカはどこかに引つ張っていかれた。

くピカの部屋く

「はっ!-!」

ピカが目を覚ました。

「ここは・・・部屋か。」

さっきみたいに真っ白ではないのですぐに断言できた。

「・・・とりあえず外の空気が吸いたいな。」

ピカはそう言って立ち上がり部屋を出た。

・ ・ 移動中 ・ ・

「ふう・・・」

外に出ると遠くに太陽が出て初めていた。

「・・・どうやら朝まで寝ちまったみたいだな。」

どうやらピカは昼からこの時間までずっと寝ていたようだ。

「・・・」

ピカは思い出していた。

マーテルと神の言葉を・・・

「世界を救うか・・・あんまり自信が無いがやってやるか!!」

ピカはそう決意し、まるで神たちに言うようにつぶやいた。

「ただし、そっちも絶対に思い出させるよ・・・交換条件だからな。」

言い終わるとピカは船に戻っていった。

第5話（眠り、そして決意）（後書き）

作者「今回は以上です。」

ピカ「あゝ、やっと目覚めた。」

作者「お疲れ様。」

クラ「・・・今回はまとめ話か？」

作者「そんなもんだね。だって書くことなかったし」

ピカ「てか、俺達何で後書きで話してんだ？」

作者「なんとなくでやりたかったから。次回から開始ね。」

クラ「はあ・・・今回は以上だ。」

作者「次は日常話にします。」

ピカ「次回もよろしくな。」

第6話（新しい仲間と爆発）（前書き）

作者「前に好きなテイルズキャラクターのこと言ってたの覚えてる？」

クラ・ピカ「知らん!!」

作者「ヒデエ!!」

クラ「でも、何で急にそんなこと聞いたのだ？」

作者「実は他にも好きなテイルズキャラいたんだ・・・（汗）」

ピカ「クラトス、こいつ斬っていい？」

作者「えっ!？」

クラ「投稿できなくなるから駄目だ。」

ピカ「ちっ・・・!!」

作者「ちっ・・・て、ヒド!!」

クラ「黙れ、早く好きなキャラクターを言え。」

作者「わかったから剣を構えないで!!・・・えっと、コレット・ティア・エステル・マルタ・ガイ・フレン・リタ・セネル・ヴェイグの9人だね。」

クラ「合計18人か・・・」

作者「この18人とピカで他の世界に飛ばされた話を作ろうと思ってるんだ!!」

クラ「どこに飛ばされるのだ？」

作者「秘密で!!」

ピカ「死ね!!（エンシェントブレード装備）」

作者「えっ・・・」

しばらくお待ちください・・・

作者「・・・（血だるまで気絶中）」

クラ「むごいな・・・」
ピカ「みねうちだ。とりあえず本編スタート!!」

第6話（新しい仲間と爆発）

「ふう……」

ここはピカの部屋。

今、外から部屋に戻った所だ。

「とりあえず、記憶の確認するか。」

そう言つてベットに座り、目をつぶった。

（……俺が今まで使っていたのは異能というのか……『電力』・『空』・『光』そして新たに『磁力』か……）

ピカは新しく『磁力』の異能を使えるようになった。

（そして、善吉のことと……箱庭学園の名前、生徒会のメンバーの名前だけ……）

善吉のことは思い出していたけど、他の生徒会のメンバーの姿はあまり思い出せなかった。

（んで、俺の新しい力……『コピーアイ』か）

ピカはコピーアイを手に入れた。

（コピーアイは……見たのをマネできる力か……）

コピーアイのくわしい説明は後々します。

「そついえば荷物も増えてたな・・・確認するか。」

荷物を調べてみた。

「これは・・・ギター？」

出てきたのはギターだった。

「・・・戦闘に使えないだろう・・・」

とりあえずしまった。

次に出てきたのは石だった。

「これは・・・エクスファイアだったような・・・」

名前以外よくわからなかった。

「最後は・・・かなりの数の鉄と水銀か・・・」

最後は沢山の鉄とビンに入った水銀だった。

「こいつは使えそうだな。」

『磁力』はこの2つを使って戦えるらしいのでかなり嬉しかった。

「・・・このくらいか。」

「ピカー、起きてる？」

廊下からカノンノの声が聞こえてきた。

「ああ、起きてるよ。」

「じゃ、入っていいかな？」

「いいぞ。」

カノンノが部屋に入ってきた。

「ピカ、アンジュさんが呼んでるよ。」

「そうか、すぐ行くよ。」

「わかったよ。・・・ピカ・・・」

「ん？どうした？」

「昨日はどうしたの？昨日、ピカの部屋に入ったら寝てて、それいらい起きなかったし・・・」

（心配させちゃったか・・・）

どうやら昨日はカノンノをかなり心配にさせたらしい。

「クラトスさんに聞いたらピカに聞けて・・・デミックスはよくわからないって言ったたし・・・何かあったの？」

「ああ・・・少し長くなるけどいいか？」

「うん・・・」

「ちよつと待って！！」

「エミル！！マルタ！！」

入ってきたのはエミルとマルタだった。
ちなみに止めたのはエミルだ。

「どうしたんだエミルとマルタ？」

「僕もそのことを知りたいんだ。教えてよピカ。」

「私はエミルについてきたんだけど・・・私も聞きたい。」

「・・・わかった・・・話そう。」

カノンノとエミルとマルタに今までのことを話した。

「これが今知っている現状だ。」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ピカは今までのことを話した。

3人は黙ったままだった。

「信じられないだろ？」

「・・・僕は信じるよ。」

エミルはそう言った。

「エミル・・・」

「何たって僕達は友達だもん。ピカのことは信じてるしね。」

「私も信じてるよ。」

「マルタ・・・」

「ピカが嘘つく人には見えないもん。だから信じるよ。」

「私もだよ、ピカ・・・。」

「カノンノ・・・」

「ピカ、私はどんなことがあってもずっとピカを信じてるよ。」

カノンノとマルタもそう言ってくれた。

「・・・3人ともありがとう。」

「」「どういたしまして!!」「」

ピカはかなり嬉しかった。

とても信じがたい話をしたのに、3人とも信じてくれたので。そしてこの4人の話を廊下で聞いていた人がいた。

クラトスだ。

（ふっ・・・昔のお前もあんな所があつたな）

彼は昔のピカを思い出していた。

（いつもは皆を楽しませて、苦しいことは1人で背負い、皆に聞か
れて話す。・・・あいつはいつもそうだった・・・今回こそは
苦しみを1人で背負うなよピカ・・・いや、友よ・・・）

クラトスはそう思いロビーに向かった。

「さて！！アンジュさんに呼ばれてるし行くか！！」

「うん！！」

4人もロビーに向かって行った。

「バンエルティア号・ロビー」

「アンジュさん。用事って・・・あなた達は？」

ピカ達はロビーについた。

そこにはアンジュと2人の女性がいた。

「彼女達は新しくギルドに入った人たちよ。」

「へー、なら自己紹介だな。俺は、ピカチュウ・ライトニング。」

「私は、カノン・グラスバレーです。」

「僕は、エミルキャスタニエ。」

「私は、マルタ・ルアルディ。」

「あたしは、ナナリー・フレッチ。よろしくね。」

「私は、ハロルド・ベルセリオス。大天才科学者よ。」

女性達はナナリーとハロルドというらしい。

ピカはナナリーの顔を見て、次にハロルドの顔を見た瞬間かなりの冷や汗が出てきた。

（な・・・何だこの感じは！！・・・初めてあつたのにかなりの恐怖感が・・・）

ピカがかかるく震えていると

「あら？あんたピカチュウだっけ？なかなか実験に使えそうな体してるじゃない」

と言われたしまった。

その瞬間ピカの体が勝手に動き走っていた。

（やばいやばいやばいやばいやばいやばい、あいつはやばい！！速く逃げない！！）

と思いながら甲板に向かって走っていた。

「グフフフ逃がさないわよ！！」

と言ってピカと同じく甲板に走っていった。

「あ！！コラハロルド！！」

「ピカ……大丈夫かな？」

「とりあえず、追いかけてよう！」

ナナリーが止めようとしたがもういなかった。

カノンノが心配していると、エミルが追いかけるようにうながした。

「そうだね！！追いかけてよう！！」

「あたしも行くよ。あたしが止められなかったせいでもあるからね。」

「私はクエストの整理とかあるから行けないけど頑張つてね。」

アンジュがそう言った後、4人でピカとハロルドを追いかけてうと
した時

ドーン！！！！

かなりデカイ爆発音が聞こえてきた。

「えっ！？何の音？」

「多分ハロルドの爆弾だと思う！急ごう！」

4人は走って甲板に行った。

ちなみにナナリーが後で説教してやると呟いていたのは余談だ。

4人が外に出た時、その場にいたのは気絶して倒れているピカとハロルドと赤いコート着た少年と大きな鎧がいた。

「数分前のバンエルティア号・甲板」

「はあ、はあ、はあ。」

ハロルドから逃げるために船外に出たピカがいた。

「しかしこれじゃ、袋のネズミじゃないか!!」

しかし急いで逃げたかったのか甲板に出てしまった。

「どうしよう・・・」

悩んでいると

「逃がさないわよ!!」

ハロルドが出てきた。

「ヤバイ!!」

「さっさと実験させなさい!!」

デカイ注射をこっち襲わせてきた。

（こうなったらこれしかねえ!!）

ピカはポーチに手をつ突っ込んだ。

ザク!!

デカイ注射が刺さった……鉄の壁に……

「あら？何処から出したのそれ？」

「秘密だ……」

「なら意地でも調べてみせるわ！！」

そう言つて沢山の注射を投げてきた。

「あまいな！！」

ピカは鉄の壁を操つて、壁を伸ばした。

「……なるほどね……そいつは水銀でしょ？」

「……正解だ……よくわかったな。」

「さらにあなたの何らかの力で水銀を動かしているようね……」

「まさかそこまではれるとはな……」

「当然よ！！なんたつて、私は大天才科学者だからね。そんなのすぐに見破れるわ。」

「関係ないと思うが……」

ピカが呆れていると……

「チャンス！！くらえ、新作爆弾！！」

ハロルドがそう言つて爆弾を投げてきた。

「危な！！」

ピカはギリギリ避けた。

しかしその爆弾が地面に当たった瞬間、辺りが光に包まれた。

「なっ！！」

「へっ？」

その後大きな爆発音が聞こえ、目の前が暗くなった。

そしてカノン達が見たように気絶して倒れているピカとハロルドと赤いコート着た少年と大きな鎧がいた。

第6話（新しい仲間と爆発）（後書き）

クラ「今回はこれくらいか・・・しかし、作者とピカが気絶中か・・・」

ただいま2人は気絶中

ピカは本編中、作者は前書きで。

クラ「・・・1人では荷が重いので新しく人を増やした・・・エミルだ。」

エミ「ど・どうもこんにちは・・・」

クラ「今回から4人でこのコーナーをしていくので読者の皆様もよろしくな。」

エミ「そういえばクラトスさん、今回出てきた小さい少年と大きな鎧って・・・」

クラ「ああ、あの2人だ。」

エミ「やつと出せたんだね・・・よかった。」

クラ「ああ・・・次回はあの2人と話すことになるだろう。」

エミ「こ・今回はここまでです・・・あ・ありがとうございました。」

クラ「次回もまたよろしく頼む・・・」

番外編（ピカの休日の過ごし方）（前書き）

クラ「投稿を遅れた理由を聞こうか・・・（剣を構る）」

作者「実は・・・急にデスクトップとノートパソコンがインターネットにいけなくなったんだ・・・」

エミ「えっ！？そんなことがあったの!？」

作者「うん・・・しかも現在進行中・・・」

クラ「なら仕方が無いな・・・けどこの話はどうやって投稿したのだ？」

作者「何回か抜き差ししてようやく点いたんだ。」

エミ「なるほど・・・でも本編ならべつの所でも書けない？」

作者「書いてたんだけど・・・今、点かないノーパーソの方に書いてた・・・」

クラ・エミ「・・・ドンマイ・・・」

作者「皆さん、投稿遅れて本当にすいませんでした・・・本編どうぞ。」

番外編（ピカの休日の過ごし方）

今日はピカの休日の過ごし方の1つを見てみよう。

（この話は、本編から未来の話です。）

AM 8：30 起床

「ふあゝ・・・朝か。」

AM 8：50 朝食

「ロックス今日もご飯が旨いな。」

「ありがとうございます。デザートにリンゴもいかがですか?」

「いただきます!!」

AM 9：30 訓練

「来い!! クラトス!!」

「ああ!! 『瞬迅剣』」

「あまいな!! よつと。」

ピカはクラトスの『瞬迅剣』をかわして剣をクラトスの肩を狙って振った。

「そつちもな。」

クラトスはそれをよんでいたのかしゃがんでかわした。

「さすがクラトス!!・・・『雷鳥』」

『電力』の力で、電気の鳥を造りクラトスに向けて放った。

「『粹護陣』」

クラトスは『雷鳥』を『粹護陣』でガードした。

「ここまでだな。」

「そうだな・・・」

AM11:00 読書

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピカが読んでいるのは三国志の小説だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

AM0:00 昼食

「ロックス、この料理何？」

「カレーですよ。」

「了解。いただきます・・・・・・・・」

「お味はいかがですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ピカさん？」

「か」

「か？」

「からい――――！！！！！！！！」

「ええ！？これ中辛ですよ!？」

「けど辛いもんは辛い—————!!!!辛い痛い辛い痛い———」

「ああ!!ピカさん暴れないで—————!!!!」

P M 0 : 3 0 昼寝

「ZZZ……………」

「ピカまた寝てる。」

昼寝をしているピカの前に現れたのはカノンノだった。

「ZZZ……………」

「……………少しくらいいいよね／／／」

そう言ってカノンノがピカに近づいていった。

(もう少し／／／)

「…………ふぁ?」

「!？」

「……………何してんのカノンノ？」

「い・いや別に／／／」

「…………?」

もう少しの所でピカが目を覚ました。

「…………そうだ!カノンノも一緒に昼寝しない？」

「えっ／／／うん／／／」

この後ピカの寝相の悪さでカノンノに抱きついてしまったのは余談

だ。

P M 3 : 0 0

「甘〜い。」

「ピカさんは、辛いのが苦手で甘いのが好きなんですね・・・」

デザートのケーキを幸せそうに食べていた。

P M 4 : 0 0 闘技場

「俺様がチャンp「壊れな!」!」

コングマンが5時近くまで技の実験台にされていた。

P M 7 : 0 0 夕食

「もぐもぐ・・・美味しい〜。」

「甘い味付けにしておきましたから。」

「ありがとうございます!」

P M 8 : 0 0 風呂

「勝負だシングー!」

「うん!!--どっちが長く風呂に入っていられるかな!」

「ああ、いくぜ!」

「うん!」

この後仲良く2人でのぼせました。

PM10:00 善吉のファッ
ションチェック

「ここをこうして……サタンカッケー……!!!!」

「善吉……0点。」

「な・お前にはこのカツコよさがわかんないのか!？」

「うん。」

「くっそ——！！！！！」

「善哉、善哉。」

PM 11:00 就寝

「おやすみ・・・」

これがピカの休日の過ごし方の1つだった。

番外編（ピカの休日の過ごし方）（後書き）

作者「よし・・・こんなもんかな。」

ピカ「これって俺の休日の過ごし方か？てか、どうやってこの場所にきた・・・？」

作者「秘密。てか急いで7話考えるから後よろしく！！」

ピカ「久々にまともだな・・・それだけパソコンの件がショックらしいな・・・ん？」

足元に紙が落ちていた。

ピカ「どれどれ・・・『パソコンの件でもしかしたら投稿が遅れるかもしれないか』・・・読者の皆様このことはよろしくね。んじや、今回はここまで。ありがとうございました。」

第7話（鋼の錬金術師・前半）（前書き）

作者「7話投稿完了！！疲れた」。

エミ「お疲れ様。」

作者「ありがと・・・ヤバイ！！学校が後よろしく！！」
エミ「えっ！？ちょ！？・・・ほ・本編どうぞ！！」

第7話（鋼の錬金術師・前半）

目を覚ますとピカはバンエルティア号の医務室にいた。

ピカは、なぜ自分がここに居るのが全くわからなかった。

（しかも誰もいないし・・・）

周りを見渡すと、本来ならばアニーがいるはずなのに何故かいなかった。

（・・・とりあえず、なにがあったか思い出すか・・・）

そう思っでピカは目を瞑り、思い返してみた。

（確か、この船にナナリーとハロルドが新しく入って・・・そして、ハロルドが何故か怖くなったから逃げたら追われたんだ・・・）

思い出しただけで、体が震えてしまった。

（・・・さらにハロルドが攻撃してきたから異能の『磁力』で対応してたら・・・爆弾を投げられて気絶したと・・・）

あれはびっくりしたなーと思っていると、医務室の扉が開いた。入ってきたのはカノンノだった。

「あ、ピカ目を覚ました？」

「ああ、何とかな。」

笑いながらそう言った。

そういえば、ピカはどのくらい眠っていたのかわからなかったので聞いてみた。

「そういえばカノンノ、俺はどのくらい気絶してたんだ？」

「えっと・・・朝は全部気絶してて今は、昼の始まりくらいだよ。」

「そうか、ありがとう。」

「そういえば、船に新しい人が来たから挨拶しに行かない？」

「ああ、わかった。」

そう言つて、ピカはベットから降りて、カノンノと一緒に新しい人の部屋に向かった。

「カノンノ・・・ごめんな。」

「どうしたの急に？」

「いや・・・また気絶したから・・・」

「・・・ならさ、今度の休みに一緒に街に行こうよ。」

「わかった。約束するよ。」

また気絶してしまったので、ピカはカノンノに誤った。

そしたら、カノンノに街に行こうと誘われた。

気絶の件もあるので約束した。

「約束だよ。・・・あつ、この部屋だよ。」

カノンノと話していたら目的の部屋に着いた。

「よし！入るぞ、カノンノ！！」

「うん！！」

「「お邪魔します！！」」

ピカとカノンノは、目的の部屋に入った。
中に居たのは、赤いコートを着た小さな少年と大きな鎧を着た人？
と善吉とクラトスがいた。

「この船の船員のピカチュウ・ライトニングと・・・」
「カノンノ・グラスバレーです。よろしくね。」

「俺は、鋼の錬金術師エドワード・エルリック！」

「僕は、アルフェンス・エルリックです。よろしく。」
「てか、クラトスと善吉は何でいるんだ？」

赤いコートを着た小さい少年はエドワード・エルリックで、大きな
鎧を着た人？はアルフェンス・エルリックだった。

ピカは、クラトスと善吉がなぜここににいるかわからなかったので、
聞いてみた。

「お前を待ってたんだよ、ピカ。」

善吉はそう言った。

「どういうことだ？」

「この2人は別の世界の者なのだ。」

「!?!?・・・でも、俺の体に何ともないぜ？」

ピカの体に何の違和感は無かった。

「・・・やはりか・・・」

「ああ・・・」

「クラトス。お前理由知ってるのか？」

「クラトスさん教えてください!!」

クラトスは理由を知っていたのでピカとカノンノは理由を教えてくださいるように言った。

「どうやらこの2人は、お前と会ったことが無いようなのだ・・・」
「！？」

クラトスは教えてくれたが、その内容にピカとカノンノは驚いた。

「本当なのか？エドワードさん、アルフェンスさん？」

「ああ、俺達2人はお前に会ったことも無いし、聞いたことも無いぜ。なあ、アル？」

「うん。」

「マジかよ・・・」

ピカはかなり落ち込んだ。

「でもなんでこの2人はこの世界に来たんだ？」

「わからん・・・今日にでもあの2人に聞くつもりだ・・・」

「そうか・・・わかったら教えてくれ。」

「エド君、アル君・・・丁度いいや、善吉君と、ピカ。ちょっといいかな？」

ピカとクラトスがあのだの2人に聞き出すことを話しているとアンジュが部屋に入ってきた。

アンジュは、最初は2人だったけど、ピカと善吉を見つけると2人も呼んだ。

「どうしたんだアンジュさん？」

「今から4人に依頼に行つて欲しいの。」

「依頼？」

「ええ、『コンフェイト大森林で魔物を30匹討伐』で依頼。」

「魔物・・・てことは自由でいいのか？」

「うん。受けてくれるかな？」

アンジュがそう言った瞬間、アンジュの後ろから鬼神が出てきたように見えた・・・絶対受けろってことか・・・

（怖！？・・・うわ・・・他の3人も震えてるし・・・俺もだけど・・・）

「わ・わかりました。受けます。」

とりあえず俺は受けることにした。

「ピカありがとう。3人は？」

「」「受けますー！」「」

「それじゃ、よろしくね。」

ピカは、クラトスとカノンノの所を見ると2人とも苦笑いしている。

（何回もあつたばいな・・・）

とりあえず、アンジュには逆らわないでおこう・・・

第7話（鋼の錬金術師・前半）（後書き）

ピカ「やっと目覚めた・・・」

エミ「お疲れ様。とりあえず・・・」

ピカ・エミ・クラ「やっと出せたな（ね）・・・」

ピカ「次は誰出すんだろう？」

エミ「わかんない？」

クラ「資料によると・・・若き虎？」

エミ「虎!？」

ピカ「・・・あいつじゃねえ？ほら、いつも親k「ネタばれ、ネタばれ。」ゴメン。」

クラ「はあ、今回はここまでだ。次回もよろしくな。」

第8話（鋼の錬金術師・後編）（前書き）

作者「いきなりですがピカの戦闘タイプを無くしました。」

ピカ「はあ！？何でだ！？」

クラ「理由があるのか？」

作者「うん。ピカは異能や素手でも戦えるし、決まりがないんだもん。」

ピカ「マジかよ・・・」

作者「というわけで、戦闘タイプ無くしました。後、好きなものと嫌いなものも更新！！」

クラ「では、本編始めるぞ。」

第8話（鋼の錬金術師・後編）

「コンフェイト大森林」

「ここは・・・俺とピカがこの世界であつた所だな。」

「・・・修行時代を思い出すなアル。」

「う・・・うん。」

「そうだな・・・エドとアルはどうしたんだ？」

善吉が辺りをみわたしていて、エドとアルは震えていた。その様子にピカは疑問を覚えたので聞いてみた。

「い・いや、何でもない。」

「う・うん。」

「何でもないだろう、何なら船に・・・は無理か。」

クエストもせずに帰ったら鬼のアンジュさん出ると感じたので断念した。

「とりあえず、行くぞ。」

「ああ。」「うん。」

俺達4人は森の中に進んだ。

その時、木の上に誰かいたが、エド達は気づかなかった。ピカを除いて。

（木の上に誰がいるな・・・害があるなら捕まえるか。）

ちなみに木の上にいた人は

（あの人は・・・！！旦那に報告だ！！）

そう思い、自分そっくりの人を出してどこかに行ってしまった。

（2人になて・・・いや、分身か。）

そう思いながら歩いていると、プチプリ達がいた。

「ピカ、こいつを倒すのか？」

「ん？ああ、そいつを倒すんだ。」

「んじゃ、早く倒して帰ろうぜ。」

「うん。」

ピカは剣を構えて、善吉とエドとアルも構えた。

「善吉はわかるけど・・・2人も素手なのか？」

「違うぜ。」

「・・・どうゆうこと？」

「見てればわかるさ、行くぞアル！！」

エドはそう言つて、手を合わせ、地面を叩いた。

その瞬間プチプリのいる地面からたくさんの棘が出てきてプチプリ達を倒した。

アルもエドと同じことをして、同じくプチプリ達を倒した。

「・・・えっ？」

ピカとはかなり驚いていた。

エドとアルは

「おう、この世界は土でも出せるんだな。」
「確かにすごいね兄さん。」

普通に話してた。

善吉は

「錬金術やっぱリスゲエ……」

と言っていた。

「2人とも……今の何？」

「何って、錬金術でけど？話してたら？」

「兄さん、ピカチュウさんとカノンさんには話してないだろ。」

「あつ、そっか。」

どうやらエドは忘れていたようだ。

「俺達は錬金術って言うのは……」

- 10分後 -

「なるほどな……」

「わかるのか？」

「微妙にだがな。」

「じゃ、説明してみてくれ。」

「……さすがにまだ無理だ……」

まだしっかり理解できていないのでそれは無理だ。

「とりあえず、錬金術は物体の再構築ができるのか？」

「うん、そうだよ。」

「俺達にもできるのか？」

「それはわかんないかな・・・」

「じゃ、マネだけでもやってみるか。」

ピカはそう言うのとエド達のように手をあわせた。

「ピカ、俺達が手をあわせてできるのは真理を見たからできるんだ。見てないからお前はできないぞ。」

「やってみないとわからないだろう。」

ピカは、両腕を地面につけた。

その瞬間さっきのエド達みたいに地面から無数の棘が出てきた。ちなみに何匹かのプチプリ達に命中していた。

「おゝできたできた。」

「・・・・・・」

「・・・・・・ん？」

「どうした？」

「お前なんで真理も見えないのにできるんだ!!」

「僕達は見えてようやくできるのに!!」

「し・しらねえよ・・・」

自分でもやってみたらできたので、ピカが困っていた。

「なあ、ピカ。」

「どうした善吉？」

「それって『創造の腕』だろ？お前昔からできただろう？」

「・・・・・・・・・・は？」

「あつ・・・・・・・・止められてたのは忘れてた。」

どうやらピカに備えられた力の1つらしい。

「『創造の腕』ってどんなのだ？」

「ん・・・・・・・・喋っていいのかな？」

「もう名前も言ってるし大丈夫だろ。」

「それもそうだな。『創造の腕』てのは・・・

- 3分後 -

つて、昔のピカが言ってたぜ。」

「ふゝん。望んだものを創り出せる力ね・・・」

「後は錬金術と同じで人間とかはできない・・・」

「錬金術とは近いもので近くないんだね。」

3人でデミックスの話を聞いて、まとめていた。

「とりあえず、そろそろ夕方だし、さっさと終わらせようぜ。」

「そうだな。」

「早く帰って寝て」

この後、ピカがエンシェントブレードで敵を切りまくり、エドとアルが練成で敵を倒しまくり、善吉がサバットで敵を蹴り倒したりしてすぐに終わった。

「さて、帰るか。」

「ああ、俺は少し用事あるから先に帰っててくれ。」

「わかった。」

「早く終わらせてね。」

エド達は船が下りるところに向かった。
ピカは3人は見送ると森の方を向いた。

「そろそろ出てきたらどうだ。」

「……やっぱり気づかれてたか……」

そう言つと、迷彩服ような服を着ている人が木の上から地面に下りてきた。

「何者だお前は？」

「は？ピカの旦那、何言つてんですか？」

「……お前は俺のことを知っているのか？」

「当たり前じゃないですか……何かあったんですか？」

「……他の世界に転生中で事故がおきて記憶を失ってしまったんだ……」

「マジッすか！？治る方法はないんですか？」

「名前を覚えてくれ、あんたが昔会ったことあるならそれで思い出せる。」

「わかりました。俺の名前は……猿飛佐助です。」

くコンフェイト大森林・奥地く

「ピカ……お主はいつたい何処におるのだ……」

頭に赤い鉢巻をつけ、上半身はライダースジャケットをつけ、下半身は赤い具足をつけた男がそう言った。

その時

「旦那、ピカの旦那を見つけました。」

ピカの所にいるはずの猿飛佐助が姿を現した。

「何！？それは真か、佐助？」

「ええ、本体が確認したら自分がピカと名乗りました。」

どうやら彼は分身らしい。

佐助に旦那と言われた男は体を振るわせ始めた。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「つつ！？・・・ちよつ、どうしたんですか？」

「佐助！！今すぐ道を教えてくれ！！」

「わかりましたから落ち着いてください・・・コンフェイト大森林の入り口近くにいます。」

「わかった！！急ぐぞ、佐助！！」

そう言つて、男は走り出した。

「あ！！旦那待ってくださいよ！！」

佐助も急いで追いかけ始めた。

（ピカよ・・・某の六文銭とピカのクルシスの輝石と誓いを果たすため・・・この真田雪村、今お主に会いに行く！！）

第8話（鋼の錬金術師・後編）（後書き）

作者「今回はここまで。」

ピカ「でたな。」

エミ「でたね。」

クラ「でたな。」

作者「だしたよ。」

ピカ「真田雪村と猿飛佐助は戦国BASARAのだから注意な。」

作者「あの2人はBASARAで1番と3番に好きだから出したかったんだ。」

エミ「じゃ、2番は誰なの？」

作者「伊達政宗！！」

クラ「そいつも出すのか？」

作者「余裕！！」

ピカ「いつ出すんだ？」

作者「……まだ未定（泣）」

ピカ「……早めに考えろよ。」

作者「わかってるよ！！後、次週はお休みします。」

エミ「どうして？」

作者「学校でテストがあるから。」

クラ「どうせいい点何かとれないだろう……」

作者「うるさい！！最後にピカの能力の説明します。次回もよろしくね。」

コピーアイ

一度見た技・動きをマネできるようになる力。

（例えマネができるようになってもその武器・動きができなくてはマネできない）

創造の腕

自身が望む物や、必要な物を作り出す力。
（人や生き物は造れない。）

番外編（気がついたら5000PVなので書いてみた）（前書き）

今回は番外編です。

作者達は本文から出てきます。

今回の主人公はエミルです。

では、本編をどうぞ！！

番外編（気がついたら5000PVなので書いてみた）

ここはある1つの居酒屋、その店の店主エミル・キャスタニエは皆の愚痴を聞いてくれることで有名で、皆からはおやじ・・・ではなくエミルと呼ばれている。

今日もエミルは店を開き、料理の仕込みをしていた。

「今日は誰が来るのかな・・・」

その時、店の扉が開いて1人の客が入ってきた。

「すいませ〜ん、コ〇ラ1つ〜」

「いらっしやい、コ〇ラ1つまいど〜」

客は作者だった。

作者は近くの席に座った。

エミルは冷蔵庫からコ〇ラを出した。

「作者、1つ聞いていい？」

「ん？何？」

「何でいきなり5000PVなの？」

「べ・別にいままでPVの見方がわからなかったんじゃないんだからね！〜！」

（うぜえ・・・）

エミルがそう思っていると

「エミル〜何でこの世にテストなんてあるんだよ〜」

「いや・・・僕に言われても・・・」

「あゝゝ！！勉強なんてしたくないゝゝ！！」

（絶対にテストの点数わるかったんだね・・・）

作者の愚痴を聞いてるとエミルは1つ思い出したことがあった。

「作者・・・年20超えてる？」

「超えてないよ。」

「帰れ。」

そのまま作者は追い出されました。（コ〇ラを渡して料金も取りました。）

「全く・・・なんで来たんだよ・・・（怒）」

作者のせいでラタスクモードになりながら愚痴っていたら、扉が開いた。

「エミル、焼き鳥と焼酎を頼む・・・」

ヴェイグが入ってきた。

「まいど！！」

エミルは焼き鳥の料理を開始した。
ヴェイグはさっきまで作者が座っていた席に座った。

「エミル・・・俺は本当に作者の好きなキャラに入っているのか・・・？」

「入ってるけど・・・どうしたの？」

「ならなぜ俺がいまだに本編に出演していないんだ!!」

「い・いや、僕に言われても・・・」

エミルの言つとおりである。

「くっ・・・このことでいつもセネルと話合っているのだぞ・・・」

「（そっいえば2人とも本編ではもう船にいることになってるんだっけ・・・）」

ただ出すタイミングがないだけです。

「くそ、作者を今度見つけたら制裁してやる!!」

「作者なら数分前にみたけど。」

エミルがそう言つとヴェイグは立ち上がった。

「エミル・・・金は払っておく・・・」

ヴェイグは剣を抜いて外に向かって走っていった。

「・・・作者大丈夫かな・・・（汗）」

エミルがそう呟くと、また扉が開いた。

「エミル、何か適当に頼む。」

ユーリが入ってきた。

「いらっしやい、枝豆と焼き鳥でいい？」

「ああ、別にいいぜ。」

エミルは先ほどの焼き鳥をすぐに出して、枝豆を洗った。

「エミル・・・俺って早めに出るはずだよな？」

「んゝ、確かに本来の道すじならすぐに出てもいいはずだけど・・・」

「

「だよな・・・何でまだ出ないんだよ・・・」

「作者のせい・・・かな。」

「・・・・・・あいつ殺す。」

ユーリは今にも剣を抜きそうだった。

その時

「エミル！！作者はどっち側に行ったんだ！！」

ヴェイグが行きよいよく扉を開いて登場した。

「一応東の方・・・ユーリ？」

ユーリに黒いオーラが見えた。

「エミル、金は置いとく・・・・・・ヴェイグ・・・・行くぞ。」

「あ・ああ・・・・（汗）」

2人は東の方に向かっていった。
その時

「エミル・・・何でユーリに黒いオーラを纏ってたんだ？」
「聞かないほうがいいぞ・・・」

ピカとクラトスが店に入ってきた。

「ちょっと制裁にかな・・・」
「誰の？」

「・・・作者。」
「ああ・・・」

2人はすぐに納得した。
2人は近くの席に座った。
エミルは1つ思い出した。

「そういえば、ピカは16じゃなかったっけ？」
「そのことなんだが、それは本来の年齢じゃないんだ。」
「・・・どういうこと？」
「クルシスの輝石は体の成長を止める能力があるんだ。」
「一応私もつけているので、私も同じだ。」

エミルは気になることがあった。

「じゃ、2人はいくつなの？」
「俺は23くらい。」
「・・・4000。」
「・・・え？」

ちなみに次の日の朝に、公園のゴミ箱にテストの答案の山の中に血だらけで作者がいたのは余談だ。

番外編（気がついたら5000PVなので書いてみた）（後書き）

今回はここまでです。

テストの結果が酷くてとても泣きそうです（泣）

今回のユーリはかなり怒っていましたね・・・そろそろ本編通りに書かないとな（汗）

次回もお楽しみに！！

第9話（若き虎と影）（前書き）

作者「ようやくインターネットが点いた・・・」

ピカ「まだ回線が悪いのか？」

作者「多分・・・」

エミ「多分って・・・（汗）」

作者「だってわかんないんだもん・・・（泣）」

クラ「それならば修理してもらえばいいだろう。」

作者「・・・金が無い・・・」

ピカ・エミ・クラ「はあ・・・」

作者「今、無一文って思っただろう！！（怒）」

ピカ・エミ・クラ「別に・・・」

作者「・・・もういい！！本編スタート！！（泣）」

第9話（若き虎と影）

「わかりました。俺の名前は・・・猿飛佐助です。」

「猿飛・・・佐助・・・つつ!?」

ピカに頭痛が襲い掛かってきた。

（くそっ!? またこの頭痛か!!）

ピカが痛みで悶えていると

「ちょ!? ピカの旦那大丈夫ですか!!」

佐助が驚いて聞いてきた。

「大丈夫・・・だから・・・安心して・・・くれ!!」

「いや!! ぜんぜん大丈夫そうじゃないですよ!!」

「大・・・丈夫だ・・・」

ピカが必死で隠そうとしていると

『うおおおおおおおおおおおおおおお!!.....!!』

誰かの叫び声が聞こえてきた。

「この声は・・・ゆ・・・きむ・・・ら?」

ピカが意識が途切れかけて目をつぶろうとした時

「コンフェイト大森林・船の手前」

「……」

善吉とエドとアルは困っていた。

理由は船の近くについた瞬間に、空からいきなりピカが降ってきたからだ。

ちなみにピカは地面に顔から入っていたが、手と足は出ていた。

（これ……どうしたらいいかな2人とも？）

（俺に聞くなよ！！）

（とりあえず抜こうよ、2人とも）

と小さい声で話し合っていると、ピカがいきなり動きだして、地面から顔を出した。

3人はかなり驚いたが、とりあえずピカに、何で空から降ってきたか聞いてみることにした。

「お・おいピカ……」

「な・何で空から降ってきたの？」

エドとアルがそう聞いた。

「……」

しかしピカは何故か何も喋らずに、ピクリとも動かなかった。次の瞬間、ピカは立ち上がりつつ森に走っていった。

「……」

3人はそれを見ていることしかできなかった。

くコンフェイト大森林・エリア1の奥地く

「旦那どうするんですか!! せっかくピラを見つけたのに殴り飛ばすなんて!!」

「う・うむ、少しやりすぎた・・・」

今、雪村は佐助に説教されていた。

理由は雪村がピカを殴り飛ばしたせいで、ピカがどこに行ったのかわからなくなってしまったからだ。

「しかもピカが頭痛に悩まされている時に殴ってるし……」

「なるほど、だからピカは避けれずに当たったのか!!」

「納得してる場合じゃないですよ!!」

「むづ・う・う」

「はあ……とりあえず、ピカを探しに行きますよ旦那。」

「ああ……行くぞさす」雪村——！！！！！！
「……ピカ……」

雪村と佐助が声のする方を向くとピカが走ってきていた。

雪村はピカを見ると、ピカの方に走りだした。

2人は両手を横に広げて、青春映画などにありそうな抱きしめあうようなシーンをしようとしていた。

ちなみに佐助は

「・・・・・・・・」

呆然とその光景を見ていた。

この殴り合いは2時間後に帰りが遅いので、探しに来たクラトスとカノンノにジャッジメントとインブレイスエンドをされてようやく止まったのは余談だ。

第9話（若き虎と影）（後書き）

作者「うゝゝ．．．やつと本編書けた．．．」

エミ「お疲れ様。」

ピカ「1つ聞きたいことあるんだがいいか？」

作者「何？」

ピカ「そろそろ本当の物語通りにまだしないのか？」

クラ「前にユーリに襲われたの忘れたのか？」

作者「忘れれるかけがないだろう．．．．次回は本編にするよ。」

エミ「やつとだね．．．（汗）」

ピカ・クラ「だな。」

作者「うるさい！！次回もよろしくね！！」

ピカ「ちなみに、またネット回線が悪くなる可能性があるのです、更新が遅れる可能性があるのですこのところもよろしくな。」

番外編（オリキャラ発表会）（前書き）

作者「今回は10000PVと1500ユニークの記念です!!」
クラ「いろいろなオリキャラが出るから楽しみにしろ。」
ピカ「じゃ、番外編行くぜ!!」

番外編（オリキャラ発表会）

ピチュー・ライトニング

髪 黄色（毛先が黒）

目の色 両目青色

性別 男

年齢 15

身長 155 体重 45

武器 マジックブック
本

好き ピカ、グラン、読書、昼寝、リンゴ

嫌い ピカのこと、好きなやつら、辛いもの

休日の過ごし方 ピカの近くで読書と昼寝

キャラクター説明

ピカの弟。（昔からの弟ではない）

ピカのことをかなり慕っており、極度のブラコン。（ピカは普通のかわいい弟としてみている。）

冷静沈着だが、ピカのことになると無くなってしまう。

ピカみたいに異能は使えないが、かわりに魔術の威力のかなりの上昇と、魔術無詠唱ができる。

身体能力は回避に特化しており残りは平凡。

カノンノ達、ピカに好意を持っているやつが嫌い（理由はピカをとられたくないから、グラン以外）で、いつも喧嘩をしている。

神とマーテルがピカに弟でもあげるかと簡単に決め造られた。（このことを知った時かなり怒っていた。）

ちなみにブラコン

闇影 絶

髪 黒

目の色 赤

性別 男

年齢 18

身長 168 体重 57

武器 鎌（混沌の鎌） 釘

好き ピカ、剣咲

嫌い 無し

能力 アブノーマル

「人心支配」
オートパイロット

「反射神経」

「受信感度」

「知られざる英雄」
ミスターアンノウン

過負荷
マイナス

「大嘘憑き（オールフィクション）」
エンカウンター

「不慮の事故」

「却本作り（ブックメーカー）」

休日の過ごし方 とくに無し

キャラクター説明

普通の世界に住んでいた悲しい高校生。

生まれた時に母が死んで、父が向かう途中で事故死したため家族の

顔を見ていない。

名前は大きくなった時に自分でつけたらしい。

孤児院で暮らしていたが、孤児院の子達に目が赤いと理由で差別され

て虐められていた。

小学、中学、高校でもそれは変わらずに同じ理由で虐められ続けた。

ただ、高校時代には2人の友達がいたが1人は事故で死んだ、1人

は転校でどこかに行ってしまった。

虐められたいたせいか体が怪我だらけで、人を信じなくなった。

自分は悪口や殴ることもなかった。

高校は寮がある学校でそこで暮らしていた。

高校3年の7月の自分の誕生日に寮に大量のガソリンをばら撒き火

をつけて、学校の生徒全員殺した。

裁判の途中で、持っていた銃で笑いながら自殺をしてこの世界を去った。

目を覚ましたらチャライ神に出会って、別の世界に行くように言われた。

チャライ神に好きな願い事を5つを選んでくれと言われて

1つ目は「過負荷の「大嘘憑き」と「不慮の事故」と「却本作り」を貰った。」

2つ目は「釘を無限に何処からでも出せる能力を貰った。」

3つ目は「能力の「人心支配」と「反射神経」と「知られざる英雄」と「受信感度」を貰った。」

4つ目は「食料とお金が無限に出るかばんを貰った。（自分しか開けない）」

5つ目は「自分の所持している能力と過負荷のON/OFFの切り替えと強化（自分の不都合の所をカット）」

の能力を選択した。

能力を授かった瞬間神の全ての能力を『大嘘憑き』で無くして釘で殺して、復活させないまま目的の世界に行った。

グラン・ハート

髪 赤

目の色 赤

性別 男

年齢 23

身長 198 体重 78

武器 ヴェリルズランス
槍

好き ピカ、ピチュー、龍牙（グランのドラゴンの名前）

嫌い ピカの障害になる者、ピカに好意のある者（ピチュー以外）

休日の過ごし方 鍛錬、ピカの警護

キャラクター説明

ーーーーの住人。

ピカと3度も戦いピカの武に惚れて配下になった。

ピカを神みたいに見かたをしているので他の人によくひかれている。

ピカの障害になる者は全て消そうとするがたまにピカに止められる。

ピチューは仲の良い共と見ている。

ドラゴンに乗って戦う、空中戦では敵無しの強さを誇る。

ピカ達みたいにチートは無いがかなり強い。

剣咲 道哉

髪 黒

目の色 黒

性別 男

年齢 18

身長 170 体重 60

武器 銃剣(2丁)

好き ピカ、闇影、アドリビトムの皆、走ることに

嫌い 普通と言われること

休日の過ごし方 武器の手入れ、ダッシュ、射撃練習、剣の技を学ぶ

キャラクター説明

ピカが人間世界の住人だったころの友達。

よくピカと闇影と遊んでいた。

走るのだけは得意だったが、他は平凡。

普通と言われると怒る。

学校で転校してからも普通に生きていたが、神にピカ達がいる世界

に飛ばせれてしまう。

武器は銃剣を使っているがチートを貰っていないので能力は平凡。

他にもオリキャラがきたらここに記入します。

グランの世界についてはまだ秘密です。

このオリキャラに、追加して欲しい能力があれば教えてください。

番外編（オリキャラ発表会）（後書き）

作者「以上、オリキャラ発表会でした。」

クラ「なかなか面白そうな者だらけだな。」

ピカ「そういえば、思い出したことがあるんだ。」

エミ「何なの？」

ピカ「作者、俺の姿のことは？」

作者「あれは……意見無いから無かったことにした！！（逃）」

ピカ「はあ！？待ちやがれえええええ！！！！（追）」

エミ・クラ「はあ……」

クラ「……しめるか……」

エミ「……しめますか……今回はここまで、次回もよろしくね。」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
いい声で鳴いてくれるじゃねえか、作者—————

(前書き)

作者「ようやく小説書けるようになった――！！！！！！！！」

エミ「けど編集って案外すぐに終わらなかつたっけ？」

ピカ「サボっていたのか？（武器を構える）」

作者「ちが……違います!!（剣を喉に当てられている）」

クラ「では何があつたのだ？」

作者「学校の行事で事業所体験に行ってたんだ、だからこんなに遅くなったの。」

ピカ「ちっ……せっかく作者を殺すチャンスだったのに（小さい声で）」

作者「（ビクッ！）と、とりあえず本編をどうぞ！」

第10話（謎の男、闇影 絶）

「あゝ．．．体と頭が痛い．．．」

「我慢しろ。」

今、ピカはヴェイグとシング、ミントの3人とヘーゼル村の人に風邪薬を届けるためにもう一度、コンフェイト大森林に訪れていた。どうやらヘーゼル村はそろそろ風が流行る季節らしいので、クレアにこのクエストを出された。

ピカを除いた3人はこのクエストに参加していたが、ピカは前回の遅くなった罰として連れて行かれた。

ちなみにピカの頭の痛みはアンジュとカノンノの説教、体の痛みは前回の術のせいである。

「そうだよピカ、元気出してガンドコ行こうよー!!」

「．．．そうだな、ガンドコ行くか!」

「シングさん、ピカさん、ガンドコでは無くガンガンじゃ．．．」

「ミント、こいつらには無駄だと思うから止めておけ。」

「ヴェイグさんかなり酷いこと言いますね．．．」

このまま4人は森の奥に進んでいった。

「ん？」

「どうしたピカ？」

「人の気配がする……」

「……何人だ？」

「1……2……さ、いや、4人だ。」

「……状況は？」

「……1つは走ってる……近くにもう1つ走ってるな、多分追いかけてるんだろう……もう2つは同じ所にいる、ゆっくりだが走っている奴らの所に向かっている。」

「……ピカ、ゆっくり歩いてる2つの気配の所を見てきてくれ。」

「わかった、ヴェイグは走ってる2つを頼んだぞ。」

「ああ。」

ピカは森の中に走っていった。

「あれ？ヴェイグ、ピカは？」

「そういえばいませんね。」

「……わからん。先に向かったのかもしれないから、今は目的地に行こう。」

「わかったよ！！」

「わかりました。」

黒い髪を伸ばした青年、ユーリ・ローウェルと、ゴーグルをかけた

赤色が目立つ赤い服を着た少女、リタ・モルディオが歩いていた。
2人は体中に傷があり、ボロボロだった。

「エステルーーーーー!!!!!!どこーーーーー!!!!!!」

「落ち着けリタ、今は休んだ方がいいぞ。」

「うるさい!!そんなことよりエステルの方が先決なの!!」

「馬鹿やろう、さっきのウリズン帝国の兵達との戦闘で体がボロボロだろうが。そんなんでサレに勝てるわけ無いだろう。」

どうやらこの2人は先ほどまで戦っていたらしい。

「けど休んでる間にエステルが何かされたらどうすんのよ!!」

「それは大丈夫だ、サレの目当ては星晶^{ホスチア}だ、あいつには危害は加えないはずだ。」

「けど・・・それなら俺の仲間が様子見に行ってるから大丈夫だ。
・・・けど・・・て、あんた誰？」

リタとユーリの会話に入り込んだのは、ピカだった。

「俺はピカチュウ・ライトニング。ギルド『アドリビトム』の1人だ。」

「そんなことよりエステルは無事なの？答えなさい!!」

「ん・・・!!やばい、追い詰められてる!!」

「な・・・い・急いで場所を教えなさい!!」

「・・・位置は・・・この森のデカイ木の所だ。」

「わかったわ!!行くわよ、ユーリ!!」

リタは走り出そうとしていた。

「待て!!怪我してるんだから休めって!!」

「そんなことしてるとエステルに危険が・・・くっ・・・」

リタは足を押さえ始めた。

どうやら足を痛めてるようだ。

「だから言つたる・・・休んでろ。」

ユーリが休むように言った。

「うるさい！！私は絶対にエステルを助けに行く！！！」

しかしリタは立ち上がりもう1度歩き始めた。

「待て。」

ピカがいきなりリタに声をかけた。

「・・・何よ・・・」

「そのエステルって人はお前の大切な人なのか？」

「当たり前よ。」

ピカはリタの目を見た。

目に曇りは無い、本当のことを言っている目だった。

ならピカのする行動は1つだ。

「・・・わかった。俺がかわりに行こう。」

「あんたに任せれる訳が無いじゃない！！」

「だが、お前とユーリは怪我してるじゃないか、それでサレって奴に勝てないと思うぜ。」

「そんなこと・・・わかってるわよ・・・」

リタは顔を俯かせた。

それでもエステルを助けたいようだった。

「んじゃ、俺は行くぜ。」

「待てよ。サレはかなり強いぜ……勝てんのか？」

ユーリがそう聞いてきた。

その答えにピカはこう返した

「安心しろ。俺、強いから。」

そう言ったらピカは、天使の羽を出して飛んでいった。

「くっ……」

ヴェイグは一人、サレと戦っていた。

シングとミントにエステルを任せて、村での因縁を絶とうとしていた。

しかしサレは前回より隙をみせないので、ヴェイグは苦戦していた。

「流石はヴェイグ、僕に傷をつけただけはあるよ……けど、これで終わりだ。」

「まだ……ここで死ぬわけにはいかない。」

「いいよ……最高だよヴェイグ!! もっと僕を楽しませてくれ!!」

そうしてサレが剣を構えようとしたが、いきなり後ろを向きだした。

「・・・・・・・・そこにいるのは誰だ！！姿を出せ！！」

サレは森の中にそう言った。

ヴェイグはピカがようやく来たと思ったが・・・

「あちゃゝ、気配を消したと思ったのにな」

姿を現したのはピカではなく見知らぬ男だった。

「殺気を出していたのに何を言う、お前・・・誰だ？」

サレは何故か震えていた。

ヴェイグはそれに疑問を抱いていた。

ヴェイグには殺気が感じなかった・・・いや、ヴェイグに殺気を向けていなかったのだ。

そして謎の男はこう答えた。

「僕？僕の名前は

闇影 絶

僕の友達やがみの八神 真耶君しんやと剣咲 道哉君を知りませんか？」

第10話（謎の男、闇影 絶）（後書き）

作者「オリキヤラ一人目登場!!」

ピカ「闇影 絶だな。けど、あいつの最後の八神 真耶ってだれだ？」

作者「よく考えれば誰だかわかるよ。それよりも新しい前書き・後書きメンバーの紹介だよ!!」

クラ「誰が来るんだ？」

作者「それは・・・エミル君どうぞ!!（カンペを渡す）」

エミ「えっ!? あっ!?・・・新しいメンバーは、ユーリ・ローウエルです!!」

ユー「やつと出したか、くそ作者!!」

作者「はい、酷い暴言ありがとうございました。今回はここまでです、次回もよろしくね。」

ユー「は!?! 他に話すことないのかよ？」

作者「無いよ。」

ユー「死ね!!（剣を振る）」

作者「だが断る!!（避ける）んじゃ、またね〜（逃走）」

ユー「待てコラ!!（追う）」

第11話（VS闇影・前編）（前書き）

作者「ようやく回線直ったーーーー!!」

ピカ「かなり長かったな……」

エミ「本当に久しぶりだよ……何日経ってるの？」

クラ「前回の投稿したのは8月10日……29日ぶりか……」

┐

ユー「あと少しで一ヶ月じゃねえか!!」

作者「これはまずい……早めに本編始めよう!!」

エミ「そうだね。では、本編スタート!!」

第11話（VS闇影・前編）

「僕？僕の名前は

闇影 絶

僕の友達の八神 真耶君と剣咲 道哉君を知りませんか？」

謎の男、闇影 絶はそう言った。

ヴェイグは、絶の姿を見て思ったことは、

背はピカより少し小さいくらい、服は体にピッタリの黒いコート、髪はコートの同じの黒。

1番気になった目の色、血のような赤の目。

その目は暗く、ほとんど生気が無い目。

だが、その目に1番似合う言い方は『殺人者』の目・・・
ヴェイグがそう思っていると、絶が

「もう1度言います。

僕の友達の八神 真耶君と剣咲 道哉君を知りませんか？

知っていないのなら殺します、知っているのなら言わせてから殺します。」

と言ってきた。

「残念だけど知らないね。けど、僕は君に殺されるつもりは無い。
逆に殺してあげよう！！」

サレはそう言うと、剣を抜き、絶に特攻した。

「突きか・・・あまいね。」

絶は何処からか鎌を取り出した。
そして鎌をサレに向かって投げた。

「あたらないね、死ね。」

サレは突きを放った。

突きはそのまま、絶の心臓に刺さった。
絶は血を流しながら倒れた。

「あの気迫でこの程度なのか・・・拍子抜けだね・・・」

サレは、もう1度ヴェイグと戦おうとヴェイグのほうを向いた。

「・・・!!サレ後ろだ!!」

「何を急に・・・!!」

サレが後ろを向くと、先ほどサレに心臓を刺された絶が立っていた。
しかも、血や怪我の後も無い状態で。

「残念だけど、この程度では僕は死なないよ。」

「ば・馬鹿な・・・心臓に刺さっていたはずなのに・・・」

「ふふふ・・・僕は不死身なの。後、ついでに言っけど

君、死んだよ。」

「は？」

その瞬間、サレの胸に絶が投げた鎌が刺さった。

「サレーーーーー!!!!!!」

「嘘……だろ……」

「残念だけど本当だよ。まずは1人目だね。」

絶は笑っていた。

そしてその目はヴェイグに向かった。

「次は君だよ。けど、君は僕の質問に答えてなかったな、早く言うてよ。」

「……………」

「ね、まだ？」

「……………許さん……」

「え？聞こえないよ……!!」

「貴様だけは許さん!!!!」

ヴェイグは背中の大剣を抜き、絶に向かった。

「大振りの連続か……これは避けるのは無理かな、ならば

『跪け（ひざまずけ）』

絶がそう言うと、ヴェイグはいきなり武器を置き、跪いた。

「な!？」

「話す気もなさそうだし……殺すか……」

絶は鎌を上にもで持ち上げ

「死ね」

笑みを浮かべながら振り下ろした。

（クレア、アドリビトムの皆・・・俺はここまでのようだ・・・）

ウェイグは死を感じ、そう考えていた。

だが

「『アタック・デイ・スクアール
鯨衝撃』」

天はまだ、ウェイグを見放してなかった。

ガギイイイイン！！！！！！

「！？」

「ウェイグ！！大丈夫か？」

「・・・ああ、ありがとう・・・ピカ。」

ウェイグの前には、剣で鎌の一撃を抑えたピカがいた。

「君は・・・誰？」

「俺か？俺はピカチュウ・ライティング、仲間を傷つけるなら俺が許さねえ！！」

第11話（VS闇影・前編）（後書き）

作者「前半終了!!」

エミ・クラ・ユー「……………」

作者「どうしたの？」

エミ「サレ……………大丈夫なの？」

作者「……………」

ユー「何か言えやクラ。」

作者「……………後半に続く!!（逃走）」

ユー「逃がすか!!!!!!」

クラ「はあ……………」

エミ「ん？紙が落ちてる……………連投します。次はパラレル物語です。楽しんでてね!!」だって。

クラ「そうか……………とりあえず、ここは閉めるぞ。」

エミ「うん。この後すぐ連投しますね、そちらもよろしくね」

番外編（パラレル物語・スカイブルー編）（前書き）

作者「はあはあ・・・何とか逃げ切った・・・今回の番外編は
パラレルワールドをもし、ピカがしたらって話だよ。では、本編ス
タート！！」

番外編（パラレル物語・スカイブルー編）

ピカチュウ・ライティング。

彼は現在は、ルミナシアで、その世界の住人のカノンノやクラトス達、別の世界の人吉善吉や真田雪村達と暮らしている。

だが、君は『パラレルワールド』というのは知っているだろうか？
世界がどんな枝分かれしていったって、いろんなパターンの未来が存在するという考えである。

「むむむむむ……」

「どうする？」

「むぐぐぐうううううー!!」

「5・・・4・・・3・・・2・・・」
「わかったわかった!! 加えていてやるわー!!」
「・・・ちつ。」

例えば今日、君は朝食を食べましたか？

食べたのなら、もしかしたらパラレルワールドの君は、朝ごはんを食べてないのかもしれない。

君は今日、宿題をしましたか？

していないのなら、もしかしたらパラレルワールドの君は、宿題をしているのかもしれない。

「ただしおぬしは絶対に世界救ってもらうからな!!」

「わかったわかった・・・あつ、どうせならその世界の全ての技m
「転送!!」

このように、もしもの数だけいろいろなパラレルワールドがあるかもしれない……

「ふっ……昔よりかなり性格が違ったの……ちゃんと戻してお
くかの……。」

これから始まる物語は、もしもの世界の1つを、ピカチュウ・ライ
トニングが転生する物語である。

「ん？……あれ？……ピカはどこに言ったんじゃ？」

「ん？・・・何処だここ？」

ピカは目を覚ました。

目を覚ますと、周りは何処かの道路のようだった。
近くにあるのは横に倒れたトラックと

「！！！」

血まみれで倒れた男が1人いた。

ピカはそれに気づくと大急ぎで駆け寄り、体を揺すってみた。

「おい！！大丈夫か、しっかりしろ！！」

男は反応が無く、じよじよに体温が小さくなっていくのもわかった。

「どうすれば・・・！？」

ピカの頭の中に1つの言葉が浮かんた。

ファーストエイド

ピカはこの言葉の意味がわからなかった。
だが

「・・・賭けてみることもありか・・・」

ピカは男にのお腹に手をあてた。

その瞬間に、ピカのいる地面から術式が出現した。
そして

「『ファーストエイド』」

唱えた。

男の体の傷が少しづつだが、癒えていく。

ピカはそれだけを見ると、少しづつ視界が暗くなっていった。

（な・・・んだ・・・し・・・か・・・い・・・・・・が）

そして完全に視界が無くなった。

その光景を倒れている男の心の中から見ている者がいた。

（ふむ・・・おかしな力を使う人間がいるのだな・・・）

「ふ」

何か声が聞こえた。
思ふことが大きい。

「ざ」

また聞こえた。
先ほどの声にひけをとらない。

「けんつ」

・・・大きい。
けど、最後のは・・・溜めてるな。

「なあああああ！！！！！！」

とりあえず目を開けた。
そこには看護師さんとおじいちゃんと、あの、血まみれで倒れていた男がいた。

・・・なぜか時間が止まっていたが・・・

「あ？」

少し時間が経つと、男が服を着て、出て行こうとしていた。
看護師さんが必死で止めている。

（しかたない・・・）

ピカは男の前に立ち、進行の邪魔をした。

「何だてめえ・・・」

「俺はピカチュウ・ライトニング。兄ちゃんは？」

「・・・かざみあまはる風見天晴・・・」

これが、『黄色の剣王』ピカチュウ・ライトニングと『リアル格ゲ
ーキャラ』風見天晴の出会い。
後にピカは、天晴の過去を知り、天晴の心の中にいるスカイブルー
と会い、天晴を守る剣となる。

後に天晴は、ピカの記憶を知り、ピカの強さと弱さを知り、ピカの
心を支える人^{とも}となる。

そして、遠くない未来に始まる『色彩戦争』に彼らは挑む・・・

番外編（パラレル物語・スカイブルー編）（後書き）

作者「番外編終了！！ちなみにスカイブルーは、ガンガンで見れるから、わからない人は見てみてね。」

連投はここまで、後、パラレル編は、ネタが無い時ちよくちよく書くことにします。こちらもよろしくね！！ではまた次回！！」

第12話（VS闇影・中編）（前書き）

作者「そついえば、剣先の武器と性格と投稿日を変更したよ。」

エミ「何で急に？」

作者「だって『剣先』なのに銃を使うのが変だもん……」

ユ「なら最初から剣にしとけよ……」

作者「ゴメン……とりあえず、武器は銃剣になるからよろしくね！」

ユ「で、性格は何でなんだ？」

作者「性格は書くの難しい……以上。」

ユ「……ボコボコにするぞテメエ。」

作者「きゃーこわーい（笑＋逃）」

ユ「……殺す……（怒＋追）」

エミ「あっ……投稿日言っていないのに行っちゃった………と、とりあえず本編スタート……」

第12話（VS闇影・中編）

「1つ聞きたいことがある・・・」

いきなり闇影が口を開いた。

「何だ？」

「さっきの技・・・」アタック・ディ・スクアール「**鮫衝撃**」をなぜ使える？」

闇影が気になっていたこと、さきほどピカが使ったアタック・ディ・スクアール「**鮫衝撃**」のことだった。

「俺にもわからない・・・体が勝手に動いて使っただけだ・・・」

「そうか・・・なら聞くことは無い!!」

絶は鎌を持ち、特攻してきた。

「いくぜ!!」

ピカは体の力を全て抜き、体を落下させた。

「その技は・・・まさか!!」

顔が地面に当たる瞬間に、足の筋力を全開にした。

「くらえ!!」おおがめりゅういかづちのかた大亀流雷電型 第二式 『紫電閃』!!」

ピカは剣を振った。

「・・・まじかよ。」

「くっ・・・ギリギリ避けきった!!」

だが、絶には当たらなかった。

「だがくそ、アブノーマル能力を使わなくては死んでいた・・・」
「アブノーマル能力・・・？」

「君に言う必要は無い!!くらえ!!」

絶は服の袖の所から釘は取り出し投げた。

「!!あぶなあ!!」

ピカは剣を振り、釘を弾いた。

「まだまだいくよ・・・」
「ネイルレイン釘雨」

ピカの頭上に沢山の釘が現れた。

「なっ!？」

「終わりだよ・・・」

絶がそう言つと釘は地面に落ちていった。

同時刻、コンフェント大森林前

そこには4人の男がいた。

3人は見覚えのある人達だった。

クラトス・アウリオン 人吉善吉 真田雪村だった。

しかし、もう1人は見覚えが無かった。

だが、姿はある男に似ていた。

黄色い髪に、先の方は黒、目の色が青だった。

「ここに兄さんが……そうですよ、クラトスさん？」

「ああ……あれは持ってきているのか？」

「当然ですよ。何たって僕は兄さんの弟

ピチュー・ライトニング

ですから。」

「まさかピカに弟がいたとわ……」

「ああ、俺やめだかちゃんも知らなかったぜ……」

「何をぼやいているんですか、早く兄さんの所に行きますよ……」

ああ、兄さん待っていてください……今、僕が兄さんの大切なものをお届けに行きます……」

ピチューはそう言うと、森に歩いていった。

このピチューを見ていた2人は

（まさかのブラコン……）

と考えていた。

「はあ……」

クラトスはため息を吐くと、2人の襟を掴んで森に入ってしまった。

第12話（VS闇影・中編）（後書き）

エミ「中編終了だよ。」

作者「ああ・・・疲れた。」

ユ一「お前のせいだな・・・」

エミ「お帰り。てか作者。」

作者「ん？」

エミ「投稿日のことは？」

作者「ああ、忘れてた。投稿日は1週間は無理だから3週間以内に
変更になりました。皆さん、その所をよろしくお願いします。」

ユ一「・・・今日は疲れたし寝る・・・」

作者「俺も・・・」

エミ「え！？ちょ！？」

作者・ユ一「おやすみ・・・」

エミ「ええー・・・じ、次回もよろしくお願いします。」

番外編（オリキャラ発表会2）（前書き）

緊急ですが、この小説の必要の無い所を削除します。
対象は本編と番外編とキャラクター説明以外です。

アンケートなのですが、これから書くパラレル編のお話は『全て1話完結』か『ある程度まで書く』か『書ける限界まで書く』のどちらがいいですか？

票が多いほうを選択したいと思います。票が無ければ『全て1話完結』になります。

期間は今から1ヶ月にします。

よかったですらよろしくお願いします。

番外編（オリキャラ発表会2）

ライチュウ・ライトニング

髪 金髪 髪の毛先は黒 目 両目青色

性別 女性

年 19

身長 170 体重 女性なので測定しない

武器 大剣（ライオウケン）

好き ピカ、ピチュウ、アドリビトムの皆、肉類、戦闘、運動
嫌い 動かないこと、野菜、読書、勉強

休日の過ごし方 特訓

キャラクター説明

ピカとピチュウの姉さん。

極度のブラコン。

かなりのバカ。

身体能力はバルバトス並、頭がロイド以下。（体は細め。）

アドリビトムの皆を妹や弟に見ている。（自分より年上以外。）

神とマーテルがピカに姉でもあげるかと簡単に決め造られた。（このことを知った時喜んでいた。）

イーブイ・ナナロア

髪 茶髪 目 黒

性別 女性

年 12

身長 151 体重 女性なので測定しない

武器 腕輪 セブンチェイニング

好き 甘いもの、フルーツ、動くこと

嫌い 動かないこと、勉強、苦いもの、おばけ

キャラクター説明

ピカがポケモンの世界にいたときの妹みたいな存在。

武器の腕輪は7つの力を持っている。

持っている力は『火』『水』『雷』『闇』『魔』『草』『氷』

おばけをみると泣く。

チートは持っていない。

せいなき なみ
静凪 奈美

髪 青 目 青

性別 女性

年 16

身長 162 体重 女性なので測定しない

武器 杖 神々のロッド

好き ピカ、ぬいぐるみ、野菜、フルーツ、読書

嫌い 肉、魚、怖いもの

キャラクター説明

ピカや絶と同じ世界の人間。

ピカが事故から救ってもらった人。

おとなしい性格でかなり落ち込みやすい性格。

ピカのが好きだが、自分のせいでピカが死んでしまったので積

極的になれない。

チートは『どんな怪我をも治す力』をもらっている。

怖いものが嫌い。

セミナ

髪 白 目 赤

性別 女性

年 ???

身長 179 体重 女性なので測定しない

武器 色々（剣や槍など何でもできる）

好き 戦闘、辛いもの、武器

嫌い 甘いもの、動かないこと

キャラクター説明

戦闘マニアでピカの師匠。

神の友達。

武器はすべて使用できる。

いつも笑いながら魔物たちと戦っている。

戦闘能力がチートなみ。

1人で3国を余裕で潰せる。

番外編（オリキャラ発表会2）（後書き）

作者「キャラは考えたけど説明はあまり思い浮かばなかった・・・」

ピカ「男たちよりあまり書いてないな・・・」

クラ「その前にセミナがおかしいだろう・・・」

作者「ピカの師匠ならこれくらい必要なと（笑）」

クラ「だからと言ってやりすぎだろう!!」

作者「それは置いといて、ピカの姉さんが出来ました。」

クラ「置いとくな!!」

ピカ「俺には他に兄弟はいるのか？」

作者「これ以上はいないかな。てかこれ以上オリキャラも考えるきないし。」

ピカ「ふーん。」

作者「あ、イーブイはカツタさんの提案でできたので、カツタさんありがとうございました。」

クラ「そろそろ時間だ、終了にするぞ。」

作者「了解!!ここまで読んでくれてありがとうございます。」

ピカ「次回もよろしくな!!」

ネタが無いので、考え中恋姫のエピローグを投稿（前書き）

作者「ネタが思い浮かばない・・・辛い・・・」

ピカ「作者、そんなところで寝てるとゴミと間違われるぞ。」

作者「どうせ俺はネタが思い浮かばないゴミさ・・・」

エミ「完全に鬱だね（汗）」

ピカ「放置しとくか、今回は作者がネタが考えきれないので急遽、考え中の恋姫エ

ピローグを投稿します。」

エミ「設定は・・・現在のルミナシアのかなり時が経っている状態。」

ピカ「姿は、今よりかなり強い、身長が伸びて、スーツを着ている以外は変更は無いかな・・・」

エミ「それじゃ、恋姫エピローグスタート!!」

ネタが無いので、考え中恋姫のエピローグを投稿

ルミナシア

この世界にディセンダーが降り立ち、とても長い時が経った・・・

今、この世界に生きる生物は1人を残して誰もいない。

世界樹が枯れて、生物が生きていけなくなったのだ。

生き残っている人間、その者の名はピカチュウ・ライトニング。

彼は、ディセンダーなのでここまで生き残れた。

彼は世界樹のおかげで生きている・・・

だが、世界樹が完全に枯れれば、彼も死んでしまうのだ。

残された時間でピカは、昔は栄えていた博物館にいた。

その地下の部屋に文献を読んでいた。

「ここにも世界樹を蘇らせる方法はないか・・・」

ピカは、どうやら世界樹を蘇らせる方法を探しているようだ。

「ここに賭けていたんだがな・・・時間からして、次の博物館に無ければ終わりだな・・・」

ピカはそう言うと、文献を元の位置に戻し、部屋を後にした。
そして、博物館を出ようとした時だった。

パリーーーーーー

博物館の中でガラスを割る音が聞こえた。

「！！・・・時間が余り無いが、見に行ってみるか・・・」

ピカは音が聞こえたほうに歩き出した。

ピカは、音がした所に到着した。

そこには、白服の少年が、博物館の展示してあった鏡を持っていた。

「君は何をしているんだ？ その鏡は博物館のだから持つて行くのは駄目だぜ。」

「うるせえ、邪魔をするなら・・・殺すぞ？」

白服の少年は殺気を出した。
だが

「ふうん・・・この程度で殺すか・・・」

笑わせんな。」

ピカはこれでもいろいろな世界に転生してきて、たくさんの強者と戦ってきた実力者だ、この程度の殺気は意味が無い。
そしてピカも、殺気を出した。

「なっ！？」

白服の少年は、体が震えだした。
どうやらピカの殺気に驚き、恐怖しているようだ。

「今なら鏡を元の位置に戻せば許してやる・・・どうする？」
「・・・ほざけ!!」

白服の少年は蹴りを繰り出してきた。
ピカはそれを、体を軽く後ろに下げてかわした。
そして手に力を込めた。

「交渉決裂だな。・・・ふっ!!」

ピカはそう言うと、白服の少年の腹にパンチを繰り出した。

「ガッ・・・!？」

白服の少年は、壁まで飛んでいった。
しかし、これがいけなかった。

パキ

どうやら白服の少年は鏡を落としてしまい、割れたしまった。

「あっ!？・・・やべえ・・・」

「・・・やってしまったな・・・」

この瞬間、鏡はいきなり強烈な光を発した。
光が消えた時には、そこにはピカの愛刀の2本しかなかった・・・

1つの物語が終わり、新たな物語が始まる。

ネタが無いので、考え中恋姫のエピローグを投稿（後書き）

ピカ「未来の俺強すぎるだろう・・・」

クラ「しかも皆死んでる・・・」

ユー「博物館の物割ってるし・・・」

作者「・・・鬱だ・・・」

ピカ「・・・とりあえず、恋姫エピローグはこんな感じらしい。」

クラ「ちなみにしばらくの間投稿も出来なくなる可能性がある。」

ユー「何でだ？」

クラ「作者が部活の大会、修学旅行、テストが連続であるらしい・・・」

ユー「・・・作者死んだな・・・」

ピカ「皆、更新遅くてゴメンな、更新はまた遅くなるかもしれないけど次回もよろしくな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646s/>

世界を救う者～ルミナシア編～

2011年11月11日14時13分発行